

佛教における女神像の位置(二)

——吉祥天——

田代有樹女

目次

はじめに

一、尊格について

—名称と発祥及び仏教神に至るまで—

I、仏教以前の吉祥天

II、仏教経典に見る吉祥天

①役割・功能

②止住処及び曼荼羅に見る方位と

眷属

二、形像について

I、アジア諸地域での吉祥天像

II、経軌に拠る吉祥天像容の図像学的

一〇分類

III、曼荼羅での吉祥天像

三、信仰について

—時代背景と本尊女神像の必要性—

I、国分寺と齋会及び吉祥天悔過

II、女帝と吉祥天像

結び

注記

図版

はじめに

前論では天女の内、弁財天についてその尊格・形像・信仰に焦点を当て述べた。本論では、吉祥天を取り上げ、「尊格」については経典を含む文献を基に、仏教以前に於ける尊格の発祥と変遷及び、仏教への流入と、役割・功能・止住処及び曼荼羅に見る方位と眷属について解明し、「形像」については現存するアジア諸地域はじめ我国の尊像及び経軌等を中心に、像容の図像学的一〇分類を試み、「信仰」については我国の吉祥天信仰の発祥と隆盛を時代背景から捕らえ、女帝称徳との結び付き及び吉祥悔過を中心に、吉祥天信仰の特徴を考察していきたい。

一、尊格について

―名称と発祥及び仏教神に至るまで―

1、仏教以前の吉祥天

吉祥天の名で知られる天女はサンスクリット語で、シュリーデーイー(Sridevi)、シュリーマハーデーイー(Sri-mahā-devī, Sri-mahādevī)、『マハーシュリー(Mahā-srī)ラクシュミー(Laksmī)』、『ナーラーヤニー(Narayanī)』、『ハリプリアー(Hari-priyā)』、『ジャラディジャー(Jaladhī-jā)』、『シュリーマニラトナサンバヴァ(Sri-maniratnasambhava)』、『パドマー(padmā)』などと呼ばれ、チベット名⁽¹⁾の dpal-ldan-lha-mo に当たる。

ではこれらの呼称の意味、或いは語義は如何なるものであろうか順に見ていきたい。

シュリーマハーデーイーの、漢訳音写名は室利摩訶提毘^{しりまかていび}である。

Srīは「光輝、美」「繁栄、幸運、富」「高位、栄光、威厳、王者の威厳」

「王のしるし」等の意で漢訳では福德、功德、吉祥、瑞相。Mahaは大きなど、漢訳では大。Devīは女神の意で漢訳では天女であるから、吉祥天、大吉祥天、吉祥天女、吉祥功德天、功德天と漢訳される。あるいは Sri-mahā-devī で功德天・大吉祥天女、Sriyā か maha devatayā で功德天・大吉祥天女と訳されることもある。また Sri のみで Laksmī つまり大海攪拌の際に生み出されたヴィシュヌ(Viṣṇu) 神の妃である美または繁栄の女神の意味を持つ⁽²⁾。

マハーシュリーの直訳は大天女となろう、摩訶室利と音写されている⁽³⁾。

ラクシュミーは、洛乞史茗と音写され、前述のごとく幸福と繁栄と美との女神。大海の攪拌から生じたもので Viṣṇu 神の妃の意味であるが、元来「標章、しるし」「悪いしるし、不幸」「良いしるし、(近づく)幸運」「(王の)守護神、威厳、栄光」「富」「美、光輝」等の意味を持つ⁽⁴⁾。

ナーラーヤニーは、ナーラーヤナ(Narayana) 那羅延天、つまり毘紐奴(Viṣṇu)の妃で那羅延妃、那羅延天妃と音写している⁽⁵⁾。

ハリプリアーの Hari は訶利と音写され、Indra 神および Viṣṇu-Kṛṣṇa 神の名称があり、priyā は「…に愛された」であるから訶利(毘紐奴)の所愛となる⁽⁶⁾。

ジャラディジャーは「大海より生まれたる」で大海生、就中大海生と訳される⁽⁷⁾。

またシュリーマニラトナサンバヴァは吉祥摩尼宝生如来とされる。また他に大吉祥天女菩薩の名称もある⁽⁸⁾。

その他、現図胎藏曼荼羅にはマハーシュリーマハーヴィドヤー(Mahāśrīmahāvīdyā)で大吉祥大明菩薩、又シュリーマハーヴィドヤー(Srīmahāvīdyā)で大吉祥明菩薩、ラクシュミーマハーヴィドヤー(Laksmī-mahāvīdyā)大吉祥変菩薩、ダカシュリー(Dakasrī)等の変化身の名も見える⁽⁹⁾。この女神は那羅延の妃でありカーマ(Kama 「愛欲神」)の母。密教においては胎藏大日の所変とし、これを金剛界大日の所変とする毘沙門天王の妃であると説く⁽¹⁰⁾。

パドマーは蓮華より生まれた女で、即ち「S.O. 神の称」となっている。⁽¹¹⁾

では次に名称の出典と吉祥天の尊格についてまず仏教以前のインド・ヒンドゥー教に関する書物から見ていきたい。

最も古いと思われるものは『リグ・ヴェーダ』x、71、2に於て「ラクシュミー」は「幸福」の意味で現れている。しかしまだ女神としての尊格を有してはいなかった。⁽¹²⁾尚ラクシュミーと水の結び付きは古く、すでに『リグ・ヴェーダ』II、35、3に見られていたよう⁽¹³⁾で、このことは後述する像容のうち「ガジャ・ラクシュミー」の発祥を示唆するものに他ならない。

『アタルヴァ・ヴェーダ』では、複数のラクシュミーが現れるが、あるものは幸福の女神であり、あるものは不幸の女神であるとす⁽¹⁴⁾。『パドマ・プラーナ』にもアラクシュミーの名で不運・不幸の姉が登場するが、アラクシュミーはラクシュミーの中の不幸の要素が独立したもので、ラクシュミーの本来の姿は幸運と不運の両方を司る女神であったとされる。⁽¹⁶⁾ラクシュミーの異名に気まぐれの意チャンチャラー⁽¹⁷⁾もあげられる。ところでアラクシュミーを黒闇天と漢訳するのか、ラクシュミーの本来の姿が幸運と不運の両方を司る女神であったことは、吉祥天に常に付随し、災禍を作す黒闇天の障害を除くために行われる、「吉祥天女法」を考察する上で見逃せない。

『ヴァージャサネーイ・サンヒター』(Vajasaneyi-samhita) XI、22)ではラクシュミーとシュリーは、太陽アーデイトヤの二人の妻として登場する⁽¹⁸⁾が、後世同一の女神と考えられるようになる。この事は、「ラクシュミー」が幸福と繁栄、「シュリー」が繁栄と栄誉を語義の代表としている事から、いずれも吉祥天を現す名称となったことと無関係ではなからう。

以上は紀元前千二百年から千年頃のヴェーダに現れたラクシュミーであるが。紀元四〜五世紀のグプタ期においてはラクシュミーとヴィシュヌの密接な関係が確立され、『ヴィシュヌ・プラーナ』や『バ

ーガヴァタ・プラーナ』をはじめ、二大叙事詩『ラーマヤナ』『マハーバーラタ』では、有名な乳海攪拌に付随した神話「亀に化身したヴィシュヌ」⁽¹⁹⁾の中でラクシュミーが乳海から現れ、ヴィシュヌ神の妻として神妃の地位を得、愛・美・繁栄の女神となったことはよく知られよう。したがって大海より生まれたジャラディジャヤ、つまり大海生、就中大海生もこの神話に由来するものであろう。

さてヴィシュヌ神の意味するものはナーラーヤニーもハリプリーヤも同様である。前者は那羅延妃、那羅延天妃と音写され、ナーラーヤナつまり那羅延天は毘紐奴のことであり、後者のハリプリーヤの Hari は訶利と音写され、Indra 神および Visnu-Kṛṣṇa 神の名称があることはすでに述べた。元来ナーラーヤナ・ハリ・ヴィシュヌは尊格を同じくするものであろうか。この三神が同一神であることは、紀元六世紀頃の人とされるアマラシンハの著書『アマラ・コーシャ』類語辞典に漸く記述があるとされること⁽²⁰⁾から、ナーラーヤニー及びハリプリーヤの名称は恐らくこの書以降のものであろう。

ともかくラクシュミーがヴィシュヌの妻となったのは、おそらく四世紀を前後とした叙事詩においてであろう。

スカンダグプタ(Skandagupta)のジュナガドゥ(Junagadh)碑文にも、ヴィシュヌをラクシュミー女神が常に住む所と述べられている。⁽²¹⁾

面白い事にヴィシュヌが様々な姿を取るとき、ラクシュミーもまた姿を変えて従う。ヴィシュヌの化身は二十二とも言われるが、後世一般的な十化身となる。そして両者共その都度呼称を変えるのである。ここでの名称は本題とはやや外れるが、参考までに五例程掲げてみたい。

ヴィシュヌが倭人(ヴァーマナ)・ブリグ家のパラシュラーマ(Parasurama)・ラグ家のラーマ王子・牧童クリシュナ・化身ヴィタル(Vital)となればラクシュミーもそれぞれに相應しく、まず水から生まれて睡蓮の花の上に浮かぶパドマー(Padma)・妻ターラニー(Dharani)・鍬の跡より生れたシーター(Sita)・牧童女ラーダー

(Radha)・そしてヴィタルに寄り添うルクミニー(Rukmini)となる。⁽²²⁾

以上のように見ると、「ラクシュミー」は元来王家の幸福、繁栄を意味するが、この名の発祥は「リグ・ヴェーダ」x、71、2に於て、女神としての尊格名ではなく、「幸福」という意味で現されているのが初見となろう。そしてラクシュミーという名称こそ、吉祥天の原語に相応しいものと思われる。

II、仏教経典に見る吉祥天

①役割・機能

さて、このヒンドウの女神はどのようにして仏教に導入され我が国へ請来されたのであろうか。

まずその考察の手掛かりとなるであろう、吉祥天の名の見える経典の中から、比較的早い時期に成立、漢訳され請来された『金光明經』、『大方等大集經』、『七佛八菩薩諸説大陀羅尼神呪經』について見ていきたい。

まず『金光明經』は紀元三〜四世紀頃の成立で、後期大乘経典に属し、漢訳には北涼の曇無讖訳 四卷、北凉玄始三〜一五 四一〜四二六)、陳の真諦訳 七卷(現存せず)、後周の闍那崛多訳 五卷、隋の宝貴訳『合部金光明經』八卷(五九七年)、唐の義浄訳『金光明最勝王經』十卷(七〇三年)の五本がある。⁽²³⁾

この内『金光明最勝王經』が最も充実した内容であることは言うまでもないが、四天王や吉祥天、辯才天等は、まさにこの『金光明經』から初めて仏教に入ったことや、この経典中の「捨身品」での捨身飼虎の話が法隆寺「玉虫厨子」の台座板絵に描かれていることは良く知られる。

従って『金光明經』が、すでに飛鳥時代には我が国に請来されていたことは、明らかであり、次いで神亀五年(七二八)頃からは『合部金光明經』が採用され、さらに天平九年(七三七)からは『金光明最勝王經』

が広く用いられるようになる。『金光明最勝王經』は、記録の上からは養老二年(七一八)に帰朝した入唐僧道慈により請来されて⁽²⁴⁾、『正倉院古文書』の記載の初見は、神亀二年(七二五)となっている。⁽²⁵⁾

以後『金光明經』は『法華經』、『仁王經』と共に我が国護国三部経の位置を確立する。そのうち『金光明最勝王經』を所依とする修法で吉祥天は「金光明最勝王経会」や「吉祥悔過会」の本尊として尊崇されるのであるが、特に吉祥悔過会においては、神護景雲元年正月(七六七)から諸国の国分寺に於いて、全国的に流布されること⁽²⁶⁾で、この経典が吉祥天信仰を考察する上で重要な経典となったことは言うまでもない。この経典と信仰についての詳細は次章で述べることにし、ここでは名称を中心に、吉祥天の役割・機能を追っていくことにする。

吉祥天は『金光明經』四卷では卷第二「功德天品第八」⁽²⁷⁾において功德天。『金光明最勝王經』十卷では卷第八「大吉祥天女品第十六」⁽²⁸⁾及び「大吉祥天女增長財物品第十七」⁽²⁹⁾において大吉祥天女、大吉祥天、吉祥天女の名で登場している。

この経では、吉祥天は過去の寶華功德海琉璃金山照明如来⁽³⁰⁾（琉璃金山寶花光照吉祥功德海如来⁽³¹⁾）の世に出生し、種々の善根を植え今福德自在を得た。若し衆生が『金光明經』を誦し又諸仏、世尊及び天女を供養すれば、所須の物皆満たされると説⁽³²⁾いて⁽³³⁾いる。

また唐の慧沼撰述(七一四年)『金光明最勝王經疏』十卷でも出生について同様に記し、「大吉祥天女品第十六」⁽³⁵⁾、「大吉祥天女增長財物品第十七」⁽³⁶⁾で吉祥天、大吉祥天、吉祥天の名称を用いているが、前者では梵語名摩訶室利提婆の語義を摩訶は大、室利は吉祥、提婆は天女であると説き、総名大吉祥天女であると述べる⁽³⁷⁾と同時に功德天の名の由来も、勝樂即ち功德の果故に功德天と名づく⁽³⁸⁾と説明している。

『大方等大集經』は隋の僧就編(開皇六年五八六)、北涼の曇無讖訳(北凉玄始三〜一五 四一〜四二六)六十卷或いは三十卷が一般的なもので異訳もあるが総て大集部に属する。吉祥天の登場する巻第五七「須彌藏分一六 声聞品第一」⁽³⁹⁾、「須彌藏分一六 菩薩禪本業品第二」⁽⁴⁰⁾、「須彌藏分一六 滅非時風雨品第三」⁽⁴¹⁾巻第五八「須彌藏分一六

陀羅尼品第四⁽⁴²⁾、は後漢(紀元二五〜二二〇)の安世高訳とされ、そこでは功德天の名称で見られる。特に「須弥藏分一六 減非時風雨品第三」では功德天が昔、釈尊と共に因陀羅幢相王仏の所に於て修行した本縁や授福、除災の機能が説かれる。名称は功德天の他に大功徳天女、功德天女で、多数の天女と共に登場する。その中には大辯天女、頗梨天女や毘舍遮の名も見える。『大方等大集經』の中でも「須彌藏分」に於ては少なくとも紀元一世紀には成立していたのであろう。『正倉院古文書』には養老六年(七二二)の記録が残されている。⁽⁴³⁾

『七佛八菩薩諸説大陀羅尼神呪經』は東晋代(二二七〜四二〇年)の訳(失訳・現存は東晋録)で四卷本である。卷三に於て吉祥天は大摩醯首羅天王、那羅延天、帝釈天等と共に大功徳天女の名で登場し、大功徳天は衆生を度す為に天女となり没溺の衆生を慰み、神呪を以てあらゆる救済をし擁護すると説いている。⁽⁴⁵⁾ 鎮護国家や請雨、あらゆる救済や除災を果たす機能ばかりではなく、疫病の流行にたいしても具体的な修法が述べられている。⁽⁴⁶⁾ 摩醯首羅天は自在天つまりシバ神(湿婆神)であり、那羅延天はビシュヌ神(毘紐奴)、そして帝釈天は釈提桓因でインドラ神のことであるから、ヴェーダでのラクシュミーはシバ神、ビシュヌ神、インドラ神等の諸神と共に相当早い時期に仏教に混入されていたことを伺い知ることができる。さて続いて経典を基に名称と共に、吉祥天の止住所或いは方位について見ていきたい。

② 止住処・方位と眷属

先の『金光明經』卷第二「功德天品」第八、及び阿地瞿多訳(六五三〜六五四)『陀羅尼集經』第十「功德天法」では吉祥天の常止住所を、於此北方。毘沙門天王有城名曰阿尼曼陀。其城有園名功德華光。於是園中有最勝園。名曰金幢。七寶極妙。比則即是我常止住處。⁽⁴⁸⁾⁽⁴⁹⁾

と述べ、北方毘沙門天王の居住である阿尼曼陀城の園、功德華園中の最勝園つまり金幢殿であると説く。

また『陀羅尼集經』では、『金光明經』とはほぼ同様の出生を説き、功德天や功德天女の名を用いた様々な召福並びに病氣平癒や調伏に用いる印を説いていると共に『金光明經』の三称はじめ様々な呪を誦せよと説き、また「功德天像法」では造像法を詳説している。像形については後に譲る事にする。

次に不空訳『大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經』⁽⁵⁰⁾でも前経と同様の出生を説き、あらゆる召福を説くが、大吉祥天女、吉祥天女、他にこの女神が未来に於いて、吉祥宝莊嚴世界で等正覚を成し、吉祥摩尼宝生如来と号すことを説いている。⁽⁵¹⁾ さらに諍訟や戦闘時に六波羅蜜をつとめる吉祥如来の名号三七種、及び煩惱を除き、一切の召福を得、大歡喜すると言う大吉祥真言と百八の名号を連ねている。⁽⁵³⁾ 唐一行記『大毘盧遮那成佛經疏』第五「入曼荼羅具縁品之餘」⁽⁵⁴⁾では、功德天は毘沙門に従う、北方に在るべし。もし本位ならば、又西方に置すべきなりとしている。この事は同じく不空訳の『大吉祥天女十二名號經』⁽⁵⁵⁾に次のような記述がある。仏が極樂世界に住して説法している時、観自在菩薩、大吉祥天女菩薩等は皆座より起り、世尊の所に詣すと説くのであるから、極樂は西方を意味している。

：住極樂世界。：爾時觀自在菩薩摩訶薩。大吉祥天女菩薩摩訶薩等。皆從座起詣世尊所。⁽⁵⁶⁾

一二の名号の中には室哩⁽⁵⁷⁾や落乞史茗⁽⁵⁸⁾の名も見える。

吉祥天は北方或いは西方に位置し、眷属は夫の那羅延天言い換えれば毘紐奴天から毘沙門天となり、また観音菩薩の眷属の一つと考えられるようになった。

輸波迦羅訳『蘊悉地羯羅經』卷中「捕瑟微迦法品第十四」⁽⁶⁰⁾には、

當前置觀世音菩薩。右邊大勢至。於此左邊置觀世音持明王等。

……於此左邊置菩薩。於此置七吉祥等天。…次置梵天與…。亦任
供養藥叉阿利底大仙…⁽⁶¹⁾

と説かれ、観音菩薩の眷属の一神ということが明らかになる。

では曼荼羅などに於ての方位・眷属はどのようになっているのであろうか。まず亮憲撰の『胎藏界曼荼羅尊位現圖抄私』卷第七の内、外金剛部院の西方四八尊、北方五二尊を説く中で、この女神は、外金剛部院のまず西方に、那羅延天と共に那羅延妃の名で登場する。

同じく北方では毘沙門天の眷属として『毘沙門經』を引いて、吉祥天、吉祥天女、功德天、功德天女、吉祥功德天の名を「眷属事」として記述している。また「毘沙門天」の冒頭にはまず毘沙門天は多聞天とも言う事を述べ、北門の多聞天の左右に、八兄弟と母及び祖母等、続いて吉祥功德天などを連ねている。⁽⁶⁴⁾ また別に北門の西面に毘沙門天を置き、その左右に夜叉八大将に何栗底母と、吉祥天を置く⁽⁶⁵⁾とする。

ここでは北方の毘沙門天と同じく北方の多聞天の眷属という二説が説かれ、我国での混乱が感じられる。さらに「那羅延妃」には、毘紐女とも言うことを、次のように説いている。

秘藏記日。那羅延妃。肉色持華。又伝毘紐女^二又或記云。

那羅延妃。種子^七三形荷葉盛華。肉色

問。何故得^レ名乎。答。同^レ輿^二那羅延天^一。種子本誓全以同也。華供^二那羅延天^一心。⁽⁶⁶⁾

では胎藏曼荼羅ではどのようなようであらうか、まず現胎藏曼荼羅『大悲胎藏大曼荼羅』を、御室版⁽⁶⁷⁾で見たいことにしたい。

この曼荼羅ではまず大吉祥明菩薩、大吉祥大明菩薩、卒塔婆大吉祥菩薩と、大吉變菩薩、水吉祥菩薩の五菩薩が観音院(蓮華部院)に配される。この院は北方に位置する。功德天の名称では、西方の虚

空藏院に、千手観音の眷属として婆敷大仙、二供養仙と共に配されている。また同じく西方に位置する最外院(外金剛部院)に、那羅延天妃が那羅延天と共に描かれている。尚毘沙門は最外院外北方に配されているが、さらに最外院南方には毘紐女が配され、そして吉祥天に常に付随する不運の女神、黒暗(闇)天女も忘れず同院に配されている。

また醍醐寺藏本『叡山本大悲胎藏大曼荼羅』⁽⁶⁸⁾では、北の観音院に、卒塔婆大吉祥菩薩、大吉祥大明菩薩、大吉祥明菩薩、水吉祥菩薩、大吉變菩薩の五変化菩薩が配され、西の蘇悉地院には千手観音の眷属として婆蘊大仙や二供養飛天らと共に功德天として描かれている。他に南の最外院には毘紐女が配されている。毘沙門天は北の最外院となっている。

この二曼荼羅では千手観音の眷属としての功德天が虚空藏院と蘇悉地院の違いが見られるが、方位について西方というのはいずれも同じである。眷属については、吉祥天は千手観音の眷属として婆蘊大仙と共に登場するが、婆蘊大仙の妃としてではなく、別に婆蘊大仙妃は、いずれにも登場している。また那羅延天妃については後者には見られないが、資料の一部が決失して現存しないので、その部分にあるいは描かれていたのかも知れない。

曼荼羅の中に同尊が複数登場するのは、決して珍しくはないが、吉祥天のように異名での複数登場は、異例と言うべきかも知れない。本来は同一神であるものが名称の漢語異訳や、教理での微妙な解釈の相違が、あたかも複数の女神を意味しているかに扱われた、いわば混交とも思われるが、後述するように、そこには一つの法則があるように思われる。

このような現象は恐らく、我国に請来される前の中国密教、或いはそれ以前に、既に見られたのではないであらうか。

この現胎藏曼荼羅は、弘法大師空海が唐の恵果から伝授されて、大同元年(八〇二)請来されたものである。⁽⁶⁹⁾

胎藏曼荼羅は大日経に基づいて描かれたものであるが、胎藏曼荼

羅の諸尊の構成や、変遷を確認する上では、金剛頂経も併せて考察する必要があると思われるが、本論ではその詳細についてまでの言及は差し控えることにして、この現図曼荼羅より成立の溯る『胎藏舊圖様』とさらに遡る『胎藏圖像』とはどうであらうか見ていくことにしたい。前者は仏陀瞿呬耶(八世紀前後)のチベット訳大日経の系統に基づき、不空三藏(七〇五―七七四)の影響がみられる。先の現図曼荼羅はこの『胎藏舊圖様』を改良整備したものとされ、これを円珍が八五四年、越州の開元寺で弟子の豊智と共に写したものである。⁽⁷⁰⁾ 後者は善無畏三藏(七三三―七三五年)が、唐の洛陽大聖善寺に於いて描いたもので(七二四―七三五のいずれかの年)、両曼荼羅共、円珍が八五八年に請来している。⁽⁷²⁾

まず『胎藏舊圖様』武藤山治氏蔵本によれば、第四院東門に妙吉祥菩薩及二侍者が、また第三院西門には那羅延天及六使者が、そして最外院西方に吉祥天女が配されている。尚、多聞天及二侍者は最外院北方に位置している。次に『胎藏圖像』熊谷直之氏蔵本では上巻に於いて第二院の蓮華部院(觀音院)では吉祥菩薩、大吉祥菩薩、落起瑟名大結護菩薩、大成就吉祥菩薩、大塔吉祥菩薩、法吉祥、僧吉祥、大水吉祥、水吉祥(或水自在)の九尊の名が見える。特に大成就吉祥菩薩と大塔吉祥菩薩は蓮華部種族生三菩薩の二尊とされる。下巻では最外院第五院の東方に、那羅延天妃が那羅延天、持蓮花天、持棒天、那羅延侍者らと名を連ねている。尚最外院第五院の北方には毘沙門天王と三毘沙門天衆が配されている。

総じて胎藏曼荼羅を考察する場合、『大日経』系の經典の成立から完成までの、諸尊の移動を見ていくと、主だった如來、四仏或いは五仏だけでも尊名に変化が見られたり、中央の大日と西方の阿弥陀(75)以外は、方位が移動したりして今日に至っていることを忘れてはならない。そのような意味を加味して天部の吉祥天を見ていくと、決して単なる混乱ではなく、一つの法則すらみえてくるのではなからうか。

現図曼荼羅では、北の觀音院に吉祥天の変化五菩薩。北の最外院

には毘沙門天が配されている。西には虚空藏院或いは蘇悉地院に功德天の名で、千手觀音の眷屬として婆蘊仙と共に描かれ、同じく西の外金部院に那羅延天と共に那羅延天妃として登場する。さらに南の外金部院には、毘紐女をも描き忘れてはいない。

胎藏藏旧図様では、第四院東門に妙吉祥菩薩及二侍者が、また第三院西門には那羅延天及六使者がそして西方の最外院に吉祥天女が配されている。尚、北方最外院に多聞天及二侍者は位置している。

次の胎藏図像はこの三曼荼羅の中で最も古い。そこでは北の觀音院に吉祥菩薩、大吉祥菩薩、落起瑟名大結護菩薩、大成就吉祥菩薩、大塔吉祥菩薩、法吉祥、僧吉祥、大水吉祥、水吉祥(或水自在)。また東方の最外院釈迦院に那羅延天妃が、那羅延天らと共に配されている。やはり北方最外院には毘沙門天王が登場している。

方角の多様性はともかく、この中で特に落起瑟名の名が見られるのは興味深い。吉祥天、功德天などの漢訳名称だけで、充分この女神の尊格が理解できようが、ラクシュミーの音写名、落起瑟名や、ヴィシュヌ天妃の意である那羅延天妃、毘紐女なども合わせ、あたかも別尊が如く登場させている。しかしその各々を見据えて見ると、なるほど、インド古代のヴェーダから脈々と流れるシュリーやラクシュミーの尊格が正確に伝えられている。幸福や吉祥という意味の言葉が女神となり、やがて神話の中でヴィシュヌ天の妃になることにより、神妃の地位を確立したこの女神の言わば生い立ちが、胎藏曼荼羅の中で、まずは名称のうえから見事に確認されたことになる。

又金剛界に於ける宝生如來とも言われるのは前述の如く、『大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經』に未來仏として吉祥摩尼宝生如來となることを次のように説いているからであろう。

：大吉祥天女。汝富於吉祥寶莊嚴世界成等正覺。號吉祥摩尼寶生如來應供正遍知。⁽⁷⁶⁾

又『覺禪鈔』卷百九「吉祥天」⁽⁷⁷⁾では『天王念誦法』を引いて、觀世音が

天女形を以て示現したものと説いている。父母としては、父を輪頭檀王、母の名を法界摩耶又は、父を頂多聞天、母を陰具大女を挙げている。そして多聞天の後妃、つまり天王の後妃で、多聞宮金幢蘭中を処とすると同時に、住所を北方の毘沙門天王宮、つまり普光蘭にある有財城ともしている。

又吉祥天女と功德天女の違いは、「義釋三云。」として、吉祥天女の旧訳を功德天女と言うと説いている。さらに「抄云。」として「所現身」をあげ次のように述べている。

…吉祥天現三種之身。為上根現大辯才天女形。為中根現大吉祥天女形。為下根現功德天形。今吉祥女福分天女。又願婆女…

そして次に、宝蔵天と吉祥天を同一に見る、或いは別天とする二説を掲げている。⁽⁷⁹⁾

宝蔵天女と吉祥天女を形像の上から同一と見ている唯一の図像集として『阿婆縛抄』⁽⁸⁰⁾を挙げることができる、そこでは『陀羅尼集經』吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經『大吉祥天女十二名號經』『金光明經』等の吉祥天経と共に『寶蔵天女陀羅尼法』などを引き、吉祥天女の独尊像の尊容は、『別尊雜記』『圖像抄』に掲げられる宝蔵天女像と一致している。⁽⁸¹⁾

吉祥天は我国の仏教尊となるや、名称、変化身、眷属、住所、方位等々に加えて尊格の混交まで現れている。

その他の眷属については、次章での形像の考察と共になお続けて見ていくことにしたい。

尚ここで吉祥天に關しての主な經典と文献を、掲げておくことにする。

『金光明最勝王經』『大方等大集經』『七佛八菩薩所說大陀羅尼神呪經』『陀羅尼集經』『大吉祥天女十二契一百八名無垢大乘經』『大日經疏』『胎藏界曼荼羅尊位現圖抄私』『大吉祥天女十二名號經』『蘇悉地羯

羅經』『不空絹索神變眞言經』『毘沙門天王經』『寶蔵天女陀羅尼法』『大寶樓閣善住秘密陀羅尼經』『大隨求陀羅尼經』『菩提場莊嚴陀羅尼經』『諸説不同記』『胎藏界七集』等。

図像では種々の『胎藏曼荼羅』や『胎藏圖像』、『胎藏舊圖樣』、『四種護摩本尊並眷属圖像』また『曼荼羅集』での「吉祥天曼荼羅」をはじめ『圖像抄』、『別尊雜記』、『寶樓閣曼荼羅』、『白寶口抄』、『天部圖像』、『佛像圖彙』等。また『続日本記』、『日本靈異記』、『東大寺要録』、『興福寺濫觴記』、『興福寺縁起』、『興福時流記』、『葉師寺濫觴私考』、『葉師寺縁起国史抄』、『国草紙』、『新国草紙』、『浄瑠璃寺流記事』、『西大寺資財流記』、『七大寺日記』等。

二、形像について

I、アジア諸地域での像容

前章で吉祥天の名称の数々を考察して来た。ここでは形像について、アジア諸地域及び我国に現存する尊像と、儀軌の上での尊像について詳しく述べていきたい。

まずアジア諸地域での像容について見ていくことにしたい。

この女神像の初見は恐らく紀元前二―一世紀頃の「ガジャラクシユミー像」(図1-6)ではなからうか。

蓮に乗るラクシユミーの左右からやはり蓮に乗る象(ガジャ)が灌水している像である。象は降雨や繁栄を司ると言い、これには立像と坐像共に現存する。いずれも一面で、二臂か四臂である。二臂の場合、一手か二手で蓮華を握る。四臂での持物は蓮華、甘露の瓶、ビルワの実、ホラ貝が多いようである。⁽⁸²⁾

時として水瓶から生え出る、満瓶蓮華の上に居るラクシユミーは、まさに豊饒の大地女神としての姿ではなからうか。

サンチー第二塔やパールフト欄楯柱又エローラ石窟寺院等に多数現存し、時として眷属にクベラを伴うことがある。⁽⁸³⁾

ラクシュミー像には、二臂(図7)、四臂(図8・9)、八臂などがあり、二臂での持物は、Sitalaと蓮華、或いは二臂共蓮を執る。又は巻き貝と蓮を持っている。⁽⁸⁴⁾

四臂ではレモンのような実・識杖・楯、葉を入れる鉢の場合と、二臂に蓮・太鼓、一手は「保護する印相」を示すか、花瓶、杖、楯またはココヤシの実とする説。⁽⁸⁵⁾ 又は法輪、巻貝、蓮、杖、或いは二手に蓮、そしてレモンのような実と神酒の瓶。又は蓮、ビルワの実、

巻貝、Ambrosiaの瓶とする説と、⁽⁸⁶⁾ 上左右の二臂に蓮、他の二臂に瓶と果実、或いは他の二臂で「願い事を授ける印相」と「敵から守る印相」を示す等の説があるが、時に「願い事を授ける印相」から、金貨か宝を放出している(図8・9)。この像容は、後述する我国の『別尊雜記』卷四四での「唐本 大辯財天」像を連想させる。⁽⁸⁷⁾

尚二臂の場合はヴィシュヌとの二尊像となる。⁽⁸⁸⁾ また眷属を見ると、ヴィシュヌの他にヴィシュヌの若い妻とされるブー(Bhū)と三神像⁽⁸⁹⁾か、サラスバティーも伴う四神像の場合もある。⁽⁹⁰⁾

八臂の場合の持物は、弓、杖、矢、蓮、法輪、巻貝、木製の杵、棒⁽⁹¹⁾となる。

II、経軌に拠る吉祥天像容の図像学的一〇分類

では次に我国に於ける吉祥天について考察していくことにしたい。

我国に現存する尊像及び、経軌等に見られる図像を眺めて見ると、その像容は繁雑とも思えるように多様である。そこでこれらを便宜上、図像学的に分析し一〇分類してみると、次のように整理することができよう。

一、左手に如意宝珠を持し、右手は与願印及びそれに類した形態を

とる立像(図11・16・28) 〓 我国現存の中で最も一般的と思われる尊容で、これは『覺禪鈔』の引く『大吉祥天女念誦法』や『天王念誦法』に拠るものと思われる。

二、尊容は一同じ坐像(図22) 〓 『陀羅尼集經』卷第十「功德天法一卷」の功德天像法に拠るものと思われる。

三、左手に如意宝珠を持し、右手に未開敷蓮花を持す立像(図20) 〓 「大弁功德天女」としての表現で、宝藏天女(図25—②) 或いは辯才天との混交⁽⁹²⁾と思われる。

四、尊容は三に同じ坐像(図24) 〓 宝藏天女(図25—①)との混交と思われる。

五、左手または右手に未開敷蓮花を持し、他手で印を結ぶ立像(図28) 及び坐像 〓 「吉祥天」としてばかりではなく「大弁功德天女」としての表現で、両者の混交とも思われる。

六、左手に盛盆を捧げ、右手で印を結ぶ立像(図32) 〓 『大悲胎藏大曼荼羅』中の千手觀音の眷属としての「功德天」。

七、左手及び両手で盛盆を捧げる坐像(図30・31) 〓 『曼荼羅中の「那羅延天」等。

八、①左手に開敷蓮花を持し、右手で印を結ぶ坐像・②左手に開敷蓮花二本を持し、右手で印を結ぶ坐像・③左手と右手にそれぞれ開敷蓮花を持す坐像・左手に開敷蓮花と未開敷蓮花を持し、右手で印を結ぶ坐像 〓 『曼荼羅中の菩薩としての表現』⁽⁹⁴⁾

九、両手で各々印を結ぶ坐像 〓 『大悲胎藏大曼荼羅』中の「毘紐女」。その他として、両手で宝瓶を捧げる坐像⁽⁹⁵⁾ 〓 両手で法輪を捧げる立像等 〓 図像集に掲載で他像との混交が推測される。⁽⁹⁶⁾

以上を踏まえ、現存する代表的な尊容を次の順次で具体的に追い、続いて文献並びに儀軌を基に考察し、尊容と共に吉祥天信仰について述べていくことにしたい。

尚、天平時代の唯一現存する遺作である、東大寺三月堂の塑像吉祥天立像と葉師寺の麻本吉祥天立像の尊容についての意味づけは、信仰に関連した次章に譲る。

東大寺三月堂 塑造 吉祥天立像(図10)。

法隆寺 塑造 吉祥天立像(図11)。

西大寺 木心乾漆造 吉祥天立像(図12)。

薬師寺 木造 吉祥天立像(図13)。

唐招堤寺 木造 吉祥天立像(図14)。

園城寺 木造 吉祥天立像(図15)。

当麻寺 木造 吉祥天立像(図16)。

園城寺 木造 護法尊立像(図17)。

浄瑠璃寺 木造 吉祥天立像(図18)。

法隆寺 木造 吉祥天立像(図19)。

妙法院 木造 大弁功德天立像(図20)。

薬師寺 麻本着彩 吉祥天立像(図21)。

興福寺 木造 吉祥天倚坐像(図22)。

及び図像集に掲載されている各尊像。

まず図10から図22を見る限り、総て一面二臂の天女形である。図14～図21は立像。図22は坐像である。

10～16は高髻を結び、唐衣を着け、沓を履く。左手の肘を屈し掌に宝珠を乗せ、右手は垂れて与願印の形を示している。ただし図10は右手を曲げ、左手を下ろしているが、損傷のため詳細は掴めない。図13は、左手欠損のため持物は判らない。しかしいずれも宝冠はなく、耳富、首飾り、瓔珞、臂釧、腕釧などの種々装飾具も付けていない。むしろ護法尊(図17)を思わせる尊容である。尚図16には現存、宝冠が付いているが他像からの転用である。

図18の浄瑠璃寺・木造 吉祥天立像はこれらの尊像と同様であるが、宝冠や瓔珞で華やかに飾られ、襜褕衣や裳・裙などの衣服も濃彩が施され、檜材の黒漆塗り春日厨子に納められている。厨子の内側背面羽目板には、八臂の大辯才天を中心に、堅牢地神や訶梨帝母など四尊が描かれている他、左右の側扉の裏に四天王を二体ずつ、正面扉の裏には梵天と帝釈天が描かれている。これは『金光明最勝王

經』卷第六「四天王護國品 第十二」に拠るものと思われるが、この像の由来の詳細は明らかではない。尚『浄瑠璃寺流記事』の

建曆二年(一一二二)

同年 月 日 吉祥天奉渡本堂丈六堂他。⁽⁹⁸⁾

の記述から、この像の造立を一一二二年とするのが通説となっている。

次に図19の法隆寺・木造 吉祥天立像と図20の妙法院・木造 大弁功德天立像を見ていきたい。

この二尊の像容も上記と類似しているが、各々頭光を付し、飾りの付いた宝冠を頂き冠帯も長く垂れる。二尊共通と思われるのは左腕を肘で屈し掌を上にし、右腕は軽く肘を曲げ、手を緩く握って何かを持つ様子が現わされていることである。いずれも右手に持物はないが、恐らく蓮の花を持っていたのではなからうか。図19の左手には、宝珠が乗せられている。図20では損失の可能性もあるのではなからうか。

以上は正面を向いた尊像であったが次の図21の薬師寺・麻本 吉祥天立像は同様の姿勢を取りながらも、やや左向きに表現されている。髻を冠を思わせる、髻の飾りを付け、頭円光が描き出され、風に靡いたような裳や天衣の風動表現は見事なものである。この図では、左手に宝珠を持ち、右手も肘を折り与願印を差し述べるような形をとっている。

吉祥天をやや左向きにするのは、天平時代に、『最勝王經』や『金光明經懺法補助儀』が示すように⁽⁹⁹⁾、釈迦如来像を中心に、吉祥天と毘沙門天を置いて、吉祥悔過の本尊として用いられたとも思われる。

図22の興福寺・木造 吉祥天倚坐像は、頭光を負い、宝冠、胸飾で飾り、沓を履き、衣や裳・裙なども装飾紋様が施された華麗な尊容を見せている坐像である。両腕共肘を曲げるが、左手に宝珠を受けるように持ち、右手は左手よりやや高くやはり与願印を示すよう

に差し延べている。厨子は黒漆塗の春日厨子で、正面扉裏面の左右に梵天・帝釈天が、また内面奥壁には七宝山図が極彩色で描かれている。本像と厨子の絵図により、その様相は『陀羅尼集經』第十「功德天法一卷」に説かれる曼荼羅を現わしたものである。この吉祥天は、台座裏の墨書銘から、造立由来が明らかで唯一の像と言ってもよく、木所大仏師寛慶、絵所大仏師法眼命尊によって造立され、唐招提寺第十代長老慶円が御衣木加持ならびに開眼供養の導師を勤め、暦応三年(一三四〇)五月 日に供養し、六月一日に唐招提寺から興福寺金堂に奉安されたことが解明されている。もとより金堂に安置されるべく造像されたことが理解され、これは吉祥天信仰と堂宇との関係を確認する上で貴重な資料と言えよう。『興福寺濫觴記』

「一 諸堂建立之次第」の金堂に、厨子内に安置された吉祥天について記述されている。

文献の上からは他に『興福寺流記』の「東院佛殿院」に、天女像一柱として、菩提樹神・辯才天女・鬼子母天・毘摩天女と共に吉祥天の名が記述されている。この中には梵釈はじめ四天王・金剛蜜迹・正了知神又、堅牢地神の名を連ねている。他に『七大寺日記』及び『七大寺巡礼私記』にも、元興寺の吉祥堂の障子絵に描かれた、正了知大将曼荼羅や毘沙門天と吉祥天の記述があり、これらは共に『金光明最勝王經』に拠るものと思われる。

では経軌の上では吉祥天の形像はどのように説かれているのだろうか。

吉祥天の造像法を記しているのは『不空罽索神變眞言經』と『寶藏天女陀羅尼法』の二經典ではなからうか。しかし後者には、前述のごとく少々疑問が残るので、厳密には『不空罽索神變眞言經』のみとすることになろう。

ところが数尊を伴う曼荼羅の中での、吉祥天の尊様について言及している經典を挙げてみると『陀羅尼集經』卷第十「功德天像法」、『毘沙門天王經』、『金光明最勝王經』卷第六「四天王護國品 第一二」、『覺禪鈔』の引く『大吉祥天女念誦法』等となる。これらを考察する前に、

まず吉祥天像の掲載されている主な図像集と、そこでの名称をまとめておきたい。

『圖像抄』卷第九「天等上」(吉祥天女)⁽¹⁰⁾、『別尊雜記』卷第四五「吉祥天・寶藏」(吉祥天)⁽¹⁰⁾、『覺禪鈔』卷一〇九「吉祥天」(吉祥天)⁽¹⁰⁾、『二八部衆并十二神將圖』(大辯功德天)⁽¹¹⁾、『天部圖像』(吉祥天)⁽¹¹⁾、『阿婆縛抄』卷第一四一「吉祥天」(吉祥天女)⁽¹¹⁾、『諸尊圖像集』卷下(功德天)⁽¹¹⁾、『四種護摩本尊並眷屬圖像』(功德天)⁽¹⁴⁾、『佛像圖彙』諸天部(吉祥天)・「觀音二八部衆」(大辯功德天)・「七福神」(吉祥天)⁽¹⁵⁾。

曼荼羅では御室版『大悲胎藏大曼荼羅』蓮華部院(大吉祥明菩薩・大吉祥大明菩薩・卒塔婆大吉祥菩薩・大吉變菩薩・水吉祥菩薩)・「虚空藏院」(功德天)・「外金剛部院南」(毘紐女・黒闇天女)・「外金剛部院西」(那羅延天妃)⁽¹⁶⁾、醍醐寺本『大悲胎藏大曼荼羅』觀音院(卒塔婆大吉祥菩薩・大吉祥大明菩薩・大吉祥明菩薩・水吉祥菩薩・大吉祥變菩薩)・「蘇悉地院」(功德天)・「最外院南」(毘紐女)⁽¹⁶⁾、『胎藏圖像』蓮華部(吉祥菩薩・大吉祥菩薩・落起瑟名大結護菩薩・大成就吉祥菩薩・大塔吉祥菩薩・法吉祥・僧吉祥・大水吉祥・水吉祥(或水自在)・「最外院」(那羅延天妃)⁽¹⁸⁾、『胎藏舊圖樣』第四院東(妙吉祥菩薩)・「最外院西」(吉祥天女)⁽¹⁹⁾、『大悲胎藏三昧那曼荼羅圖』(那羅延天后・毘紐女・毘沙門天后)⁽²⁰⁾、『曼荼羅集』吉祥天曼荼羅(『陀羅尼集經』卷第十を引用)、『寶樓閣經曼荼羅』(建立曼荼羅品第七)、『畫像品第八』共)、『太元曼荼羅』、『菩提場莊嚴經曼荼羅』、『毘沙門天曼荼羅』等々。

では先に見た『不空罽索神變眞言經』と『寶藏天女陀羅尼法』についての内容を順次解説していきたい。

『不空罽索神變眞言經』卷第十一「悉地王眞言品 第十五」では、

…以錫鐵造功德天像。半跏趺坐手執蓮花。衣服鑲釧七寶瓔珞而莊嚴之…⁽²²⁾

と述べ、半跏趺坐で、持物を蓮花としている。これに相應する尊容は図10～22に見ることはできない。

『寶藏天女陀羅尼法』⁽¹²⁴⁾では、

…天女身長二尺五寸。頭作花冠所點花極 妙端正。身著紫袍金帶鳥靴。右手把蓮花。左手把如意寶珠。其天女端正光明。⁽¹²⁵⁾

として、天女の身長は二尺五寸で、右手に蓮花を把り。左手に如意寶珠を把ると説いている。この図は『阿婆縛抄』では吉祥天女、『別尊雜記』と『圖像抄』では寶藏天女として共に坐像を掲げている(図24・25—①)。

立像では『天部形像』での寶藏天(図25—②)を挙げることができ。これに相應する尊容は、像高を別として、図19と図20が挙げられるのではなからうか。但し当初、右手に蓮花を持していたとしての、推測となるが、この吉祥天と寶藏天の尊容はかなり酷似し、形像の上から尊像を見分けることはできない。

III、曼荼羅での像容

『陀羅尼集經』卷第十「功德天法 一卷」の功德天像法では、

其功德天像。身端正赤白色二臂。畫作種種瓔珞環釧耳 天衣寶冠。天女左手持如意珠。右手施無畏。宣臺上坐。左邊畫梵摩天。手執寶鏡。右邊畫帝釈天。如散華供養天女。背後各畫一七寶山。於天像上五色雲。雲上安六牙白象。象鼻絞馬腦瓶。瓶中傾出種種寶物。灌於功德天頂上。天神背後畫百寶華林。頭上畫作千葉寶蓋。蓋上作諸天伎樂散華供養。其象底下右邊。復畫作呪師形。著鮮白衣。手把香鑪。胡跪句供養。於白素紬上坐。以上功德天像法…又一像法。劫寶木作一天女形。身長一寸。(圖26)

と述べているが、ここでの吉祥天は二臂で宣臺上に坐し、左手に如意珠を持ち、右手は施無畏の印相を示すと説く。そして左辺に寶鏡を持つ梵天、右辺に帝釈天を配し、背後には七宝山と五色雲。雲上には六牙白象が鼻に馬腦瓶を絞り、瓶中の種々の宝物を傾出して功德天の頂上に灌ぐのである。

これは先にも少し触れたが、図22の吉祥天倚像とその厨子絵に具現されている。

「功德天法」では象は一頭であるが吉祥天の頭上に象が配され、宝物を浴びるといふ様相は、前述の「ガジャラクシュミー像」を連想させる。

また『阿婆縛抄』卷第一三六「毘沙門天王」に所載されている図像69「吉祥天女並毘沙門天王」はこの曼荼羅の向かって右側に毘沙門天を配している。毘沙門天の持物は左手に宝塔、右手に宝棒で、二鬼上に遊戯座で坐している。この図からは先の「クベラとガジャラクシュミー像」との類似性を覚える。

また釈迦如来像を中心とした安置法としては、不空訳『毘沙門天王經』に次のようにある。

中心畫釋迦牟尼佛作說法相。佛右邊畫吉祥天女像。眼目廣長顔貌寂靜。首戴天冠瓔珞臂釧莊嚴其身。右手作施願手左手執開敷蓮花。⁽¹²⁷⁾

また『覺禪鈔』『阿婆縛抄』にはそれぞれ次のように述べられている。

『覺禪鈔』卷一〇九「吉祥天」⁽¹²⁸⁾
毘沙門經云。畫吉祥天女形。眼廣長顔貌寂靜。首戴天冠。瓔珞臂釧莊嚴其身。右手作施願手。左手執開敷蓮花云々。⁽¹²⁹⁾

寶勝王經六云。於白疊上畫佛形像。於佛左邊作吉祥天像。於佛右

邊作多聞天像。并畫男女眷屬云々⁽¹³¹⁾

毘沙門天王經云。中心畫釋迦。作說法相。佛左畫吉祥天云々⁽¹³²⁾

『阿婆縛抄』卷第一三六「毘沙門天王」

毘沙門經云。中心畫釋迦牟尼佛。作說法相。佛右邊畫吉祥天女。右手作施願手。左手執開敷紅蓮花。左邊畫毘沙門天王。左手捧塔。眼視於塔。右手執持寶棒云々⁽¹³³⁾

右手で施願印を示し、左手に開敷蓮花を執る吉祥天(図28)を、釈迦の右或いは左に置き、毘沙門天王との三尊形式をとるよう述べている。

このように釈迦を中心にした三尊形式は、『最勝王經』卷第六「四天王護國品第十二」では、次のように釈迦の左に吉祥天女、右に多聞天としており、『金光明經儀法補助儀』にも、同様に、中央釈迦如来、左に吉祥功德天、右に辯才天と四天王または簡略形式として釈迦如来を中心にした吉祥天、多聞天の三尊とする⁽¹³⁴⁾。

吉祥天を釈迦如来の右とするか、左とするのかは非常に曖昧となる。

『最勝王經』卷第六「四天王護國品第十二」⁽¹³⁵⁾

……畫佛形像。……佛左邊。作吉祥天女像。……佛右邊作多聞天像。并畫男女眷屬之類。……

この他には『覺禪鈔』の引く『大吉祥天女念誦法』に、

大吉祥天女念誦法云。須造像用華木。其形像。左持寶珠。右作與願印。身白色。如十五歲女。以種々天衣。微妙莊嚴。現天女形故。不著法衣。以天衣纏其身。左邊畫妙見天女。左寶鉢。右作施無畏。右邊畫功德天女。左手鉢盛花。右掌向外。復左邊畫辯財天女。左手持三劍。右手執利劍。右邊畫大光天女。左手持日輪。右手與願印。復次四方畫四天王。無量眷屬。恭敬圍繞云々⁽¹³⁷⁾

と述べられている。ここで説かれる、左手に宝珠を持ち、右手を與願印とする吉祥天は、我国に現存する最も代表的な尊容と云うことができよう。

『覺禪鈔』には『天王念誦法』を引いて次のような記述も見られる。

天王念誦法云。左持如意寶。右作與願印。身赤白色。曰吉祥天云々⁽¹³⁸⁾

先に見た図19と図20や、欠損して不明なものを除いて、総て左手に宝珠を持ち、右手は與願の印相を示している(図29)。

またこの文の中で、左手に盛盆を持ち、右掌を外に向ける功德天女が登場しているが、この像は坐像では『四種護摩本尊並眷屬圖像』の功德天(図30)と、『大悲胎藏大曼荼羅』では那羅延天后(図31)、立像では千手觀音の眷屬として、婆蘇仙と対にして所載されている功德天(図32)を挙げることができる。

尚この像に酷似した点で興味ある尊像として『別尊雜記』諸尊圖像集の伎芸天をあげておきたい。

また『大悲胎藏大曼荼羅』での毘紐女、『胎藏圖像』での吉祥菩薩、大吉祥菩薩、大成就吉祥菩薩、大塔吉祥菩薩も参考までに掲げておきたい。

『覺禪鈔』ではまた『毘沙門天王功德經法』を引用し多聞天の脇侍を説き、次のように子を善膩師童子としている。

毘沙門天王功德經法云。毘沙門天。左脇有女。號吉祥天女。右脇有一童子。禪膩師童子云々(図27)⁽¹³⁹⁾

このように様々に説かれる吉祥天を見てくると、吉祥天女の眷屬である那羅延天及び毘沙門天と、宝藏天女、持世菩薩、訶梨帝母、宝藏神等の混交が、すでに西域でなされていたことが判明し、今後はクベラ、パーンチカ、ジャンバラ、ヴァイシュラーヴァナとハーリティー、ターラー、ヴァスダーラー等の配偶関係を別の角度から

見直していく必要もあろう。

『寶樓閣曼荼羅』では吉祥天は宝瓶を持つ。

その他果物の鉢を持つもの、後ろを向いて法輪を執るもの等がある。

吉祥天像は「大吉祥天菩薩像一軀」として円行により請来されていることは『靈巖寺和尚請來法門道具等目錄』一卷により明らかである。その像はいったいどの様な像容であったのであろうか。円行の在唐期間は承和五年(八三八)から六年(八三九)である。

我国では、すでに神護景雲元年(七六七)より、諸国の国分寺である金光明四天王護国之寺に於いて吉祥天を本尊として行う修法、吉祥天悔過が行われていたことは、『続日本記』等に記されている。吉祥天悔過は宝龜二年(七七二)には一端停止するが翌年には再開し、毎年正月に一七日間修し恒例としている。さらに承和六年(八三九)からは、国分寺で行っていた吉祥天悔過を、国庁ですることに改めている。この年は奇しくも円行帰朝の年と一致している。また吉祥天悔過は吉祥堂や金堂でも行われた。

現存する尊像が、当初どのような修法、或いは信仰に用いられたのかは明らかではないが、記録に残された限りの文献及び寺志などから、我国での吉祥天信仰の発祥とその変遷を、次章で追ってみてい。

三、信仰について

―時代背景と本尊女神像の必要性―

1、国分寺と設齋及び吉祥悔過

以上吉祥天の尊格と出典を見てきたが、次に信仰の具体的な意義と形態の必要性について、主に信仰の発祥期の天平時代を中心に、

考察していくことにしたい。

吉祥天ばかりではなく、訶梨帝母、辯才天の三神の信仰を考察するためには、まず『金光明經』を取り上げなくてはならない。この經典が、吉祥天信仰の重要な所依經典であるばかりではなく、この三神がこの経によって初めて仏教に混入され、我国に早くから請来されたことは、言換えれば、この三女神の我国での信仰はかなり古くから、しかも同時に開始されたことを意味する。『金光明經』によって三神が同時に請来されたのにもかかわらず、個々の信仰の展開は非常に異なり、信仰の流行した時期や信者の層までも特色の異なるものとなった。『金光明經』はすでに飛鳥時代に請来されていたばかりではなく、国家仏教の成立をみた天武朝には、『仁王經』と共に国家仏教政策の上で重んじられ、聖武朝の国分寺創建の発願に際しては『金光明經』、『仁王經』は言うまでもなく、『法華經』も国家護持の重要な經典として採用されている。この護国三部經の中でもとりわけ『金光明經』がこの時期、最も重要な經典となった。では何故この時期この經典が重要經典となったのであろうか。この点を明らかにすることから、吉祥天信仰の考察を始める必要がある。

まず『金光明經』は前述のように、その成立はすでに紀元三〇四世紀頃であるが、漢訳には北涼の曇無讖訳 四卷(五世紀初)、陳の真諦訳 七卷(六世紀中)、後周の闍那崛多訳 五卷(六世紀中)の『金光明經』と、隋の宝貴訳『合部金光明經』八卷(五九七)、それに唐の義浄訳『金光明最勝王經』十卷(七〇三年)などがある。このように時代を経ることにより『金光明經』は、巻や品本が増補され、『金光明最勝王經』が最も充実したものとなった。我国に請来され当時採用されたのは、曇無讖訳『金光明經』四卷、宝貴訳『合部金光明經』八卷そして『最勝王經』と略される義浄訳『金光明最勝王經』十卷の三本である。

『金光明經』の伝来は、飛鳥時代であったが、次いで神龜五年(七二八)頃からは『合部金光明經』が、さらに聖武天皇の即位(七二四)と同時に『金光明最勝王經』が用いられ、国分寺創建頃の天平九年(七三七)からは広く諸国で用いられるようになる。先にも述べたが『金光

明最勝王經』は、記録の上では養老二年(七一八)に入唐僧道慈により請来され、『正倉院古文書』の記載の初見は、神亀二年(七二五)となっている。このように見てくると、中国で『金光明經』が漢訳され、内容が増補される度に、我国にもたらされ、順次採用され、国家法要に早くから用いられて来たことになる。

なぜ我国の天皇は、この經典を用いなくてはならなかったのだろうか。

『金光明經』は鎮護国家・滅罪攘災という現世利益の機能や懺悔の法を著わした、呪術的色彩の濃厚な經典である。『最勝王經』の「四天王觀察人天品第十一」⁽¹⁴⁾では、この經を奉持の国王及び人民僧俗等あるときは、二十八部の神将を率いて之を護衛し、恭敬尊重し、安穩豊樂にして、諸の災患を除くと説き、「四天王護國品」では四天王の正法護持を説き、本經伝持の国王を守護し、其の国民、国土は、災変や疫病からも救済されるとし、四天王はじめ梵釈、大辯財天、大吉祥天、堅牢地神、正了知大将、二十八部諸業叉神、自在天、金剛密主、宝賢大将、訶利帝母五百眷属、龍王の名を連ね、さらに一切諸天神が顕現し、無量の福德を与えると言う。また「王法正論品第二十」⁽¹⁵⁾は国王に対する教訓、正法法宝を尊重すべき事を力説している。

鎮護国家の經典として誠に相応しい、打ってつけの内容である。この内容を重んじ、仏教伝播の西域諸国の国王は好んでこの經を採用したに違ひなからう。仏教伝来後の我国の天皇たちが、中国での最新の訳本が伝わることに、積極的に採用してきたことは、仏教国の例外ではなかった。

また「序品第一」⁽¹⁶⁾、「夢見金鼓懺悔品第四」⁽¹⁷⁾、「滅業障品第五」⁽¹⁸⁾では、自己罪業の告白発露の至痛、至切を懺悔、悔過する法が盛んに述べられ、滅罪攘災を説いている。「序品第一」では吉祥懺悔の法要を述べ、仏陀とこの經の威力及び四天王、大辯才天女、訶利帝母神、堅牢地神等の護衛あることを述べている。

更に「大吉祥天女品第十六」⁽¹⁹⁾では本經奉持の行者には大吉祥天女の功德により、飲食・衣服・臥具・医薬その他の資財を与え、五穀百果で滋養し、苗稼は悉く長育するといひ、「大吉祥天女增長財物品第十七」⁽²⁰⁾では、仏及び本經の名号を称揚して供養請召すれば財穀を増長し希求する請願は成就すると言ひ、前品と合わせ専ら福德富榮の天祐を強調している。「大辯才天女品第十五之二」⁽²¹⁾、「大辯才天女品第十五之二」⁽²²⁾では、本經誦誦、講説の行者に対し、総慧辯才を賦与し、また咒業洗浴の法で病疫、鬪諍、蠱毒の障難を除滅するとし、大辯才天女の威徳功力を説く。後者の中に列挙される自在辯才には、訶哩底母妙辯才の名も見える。「大辯才天女讚歎品第二十」⁽²³⁾では、修辭詩歌の女神大辯才天女の讚歎を記している。

また「堅牢地神品第十八」⁽²⁴⁾では、本經奉持者に対する地神の守護利益を説き、神呪を數篇述べている。この堅牢地神は、辯才天信仰との関連から重要な女神となろう。

更に「諸天藥叉護持品第二十二」⁽²⁵⁾では、天界の諸神夜叉鬼神の名を列挙し、これら諸神が本經奉持者を擁護すると共に、特に国土の安寧・国賊怨敵の退散を説いている。

これらの諸品では、女神の威力や功德を強調しており、この事は『最勝王經』に於いて、女神が重要な役割を担っていることを意味付けている。

綿密には、義浄訳『最勝王經』では、『金光明經』や『合部金光明經』での「功德天品」を「大吉祥天女品」と「大吉祥天女增長財物品」とに分け、更に「大辯才天女讚歎品」等を追加増補している。女神の威力や機能を強調・拡大し、崇拜の啓蒙をも意味付けたのは、唐の義浄が、当時の女帝則天武后を意識して、と言うより武后のために増補翻訳を行ったことに他ならない。

後述するが、我国での女帝称徳と道鏡の関係を引き合いに出すまでもなく、唐の則天武后と義浄の親密な関係は、広く知られるところである。

吉祥天を本尊とする吉祥悔過でこの經は、懺悔機能を發揮するの

である。吉祥悔過について述べる前に、まず当時の国家法会を見ていくことにしたい。

我国の法会の最古の記録としては、『日本書紀』敏達天皇一三年(五八四)の条に見える大会の設齋である。ここでの内容は明らかではないが、恐らく何らかの法会を行った後、食事を施す齋食の事と思われる。しかし、単に食事を施すだけではなく、設齋が具体的な法会の意味を示しているように思われる。同様の意味からすれば、天平勝宝四年(七五二)の、東大寺大仏開眼供養の法会を『東大寺要録』では設齋と記している。

設齋に次ぐ法会としては、經典の講説がある。推古天皇一四年(六〇六)の聖徳太子による『勝鬘經』、『法華經』、『維摩經』の三經講讀は良く知られている。經典講説の法会には、単に經を講ずるだけのもののほか、講ぜられた内容について論議する論議法要、論題を設け、所論を述べて問答をする堅義論議法要などがある。堅義論議法要は奈良時代当時にはまだ記録に挙っていないが、講説の法会は、国家の公的な法要として恒例化された。この法会は、講ずる經典によって種類も異なるが、この時期最も多く用いられたのはこの『金光明經』と『仁王經』である。

『仁王經』の講説は、斉明六年(六六〇)仁王般若之会が初めて行われ、以後度々行われた中には「護國品」に拠るものもあった。

『金光明經』を用いた初めての法会としては、天武天皇九年(六八〇)五月に行われた、『金光明經』の講説で、朱鳥元年には宮中で百人の僧によって読誦されている。また持統天皇八年(六九四)にはこの經百部を、諸国に送り、正月に読誦させ、同一〇年(六九六)には、諸国で読誦をさせるため、毎年一二月晦に淨行者一〇人を得度させている。又天平九年(七三七)にも大極殿で法会は行われており、天平六年(七三四)の太政官符では、『最勝王經』の暗誦を得度の要件としたとも言われる。

このように『金光明經』の講説は、僧侶の養成、經卷の配布など律令政府の仏教政策の基本原則と密接に係わっていた。

神護景雲元年(七六七)からは、吉祥悔過会と対になって『最勝王經』の講説が宮中の重要な法会となり、毎年正月の一七日間修し恒例とした。これは後に御齋会と呼ばれるようになる。

法会の中には講説と並んで転読や読誦もあり、広く用いられた。さらにこの時期、悔過法会が重要な位置を占めている。悔過は、罪過を懺悔し、罪報からの放免を願う行為であり、元來僧侶が得度、受戒に際して自己に対して行う作法であったが、我国、国家仏教にあっては、国家安穩や五穀豊穰を祈願する、僧侶の自利に對して、利他の行為に変容した法会となった。

悔過の行為は、『日本書紀』の「皇極元年(六四二)」「朱鳥元年(六八六)」の条に見られるよう、既に古くから行われていたようである。それも本尊によって、十一面悔過、葉師悔過、吉祥悔過、文殊悔過、阿弥陀悔過等、種々行われた。このうち公的に重視され、国家法会ともなったのが、吉祥悔過である。

女帝称徳は神護景雲元年(七六七)、春正月、諸国の国分寺で吉祥天悔過の法会を行うべく勅している。これは初めて国家が行う吉祥天悔過で、『続日本紀』卷第二八 神護景雲元年 春正月己未の条には次のように述べられ、吉祥天悔過の功德によって、天下太平し五穀が成熟し、万民の暮らしは安穩で、諸方の生き者が同様にこの福德を被ることができると説いている。

機内七道諸國、一七日間、各於國分金光明寺、行吉祥天悔過之法、因此功德、天下太平、風雨順時、五穀成熟、兆民快樂、十方有情、同霑此福。

ところでこの吉祥天悔過はこの時期、国分寺で行なわれたが、国分寺は先の聖武天皇が天平九年(七三七)創建の発願をし、同一三年(七四一)にはほぼ維持形態が整ったとされている。国分寺創建の年度については今だ異論があるが、その経過はほぼ次のようである。

当時、数年間続いた凶作と疫病にさいし、天平九年(七三七)三月、諸国に丈六の釈迦如来像各一体、脇侍二体を造らせ、『大般若經』各一部を書写させた。天平十二年(七四〇)六月、国ごとに七重塔一基を造り、『法華經』十を書写させた。九月には、広嗣の乱平定を祈念し、国ごとに七尺の観音像一体を造り、『観音經』十卷を書写させた。翌天平十三年(七四二)二月、七重塔一基を造り、『最勝王經』と『法華經』を各十部ずつ書写させた。また、国分寺を僧二〇名の僧寺と僧尼一〇名の尼寺に分け、その名は、前者を金光明四天王護国之寺、後者を法華滅罪之寺とし、各々金堂と七重塔を造立した。

その頃、聖武天皇宸筆の金字『最勝王經』を一部ずつ塔毎に安置させ、僧尼に読誦させたものと思われる。そして犯戒の僧尼には、毎月八日に必ず『最勝王經』を転読させている。

このようにして八世紀末頃には国分二寺の諸国での創建はかなり整えられ、吉祥天を祀べく吉祥悔過を遍満させるに至った。

尚、国分寺の濫觴は、その基盤を、すでに国家仏教を目指した天武朝に溯ると考えられるが、ともかく、聖武天皇により、僧寺を金光明四天王護国之寺としたのは、『金光明經』を読誦し講説する功力により、四天王及び眷属の擁護を受け、怨敵降伏・災変穰禱・疾疫除滅を果たし、国土安穩を願うためであり、尼寺を法華滅罪之寺としたのは、『法華經』の功德により、女人の五障を滅し、二世安樂を願うものである。共に聖武天皇の発願とされるが、後者に於ては特に、時の光明皇后の勸進のもとで建立の実現に至ったのであろう。『法華經』は、この時代、書写・読誦・講説されたが、この経の悪人や女性成仏の経説は、やがて次の平安時代を通じて身分及び階層を越え広く受容され、鎌倉時代に至って法華神道に展開していったことは、特筆すべきであろう。

さてこのようにして初めて諸国の国分寺で行われた吉祥悔過の本

尊・吉祥天が、如何なる尊容であったのかは、想像の域を脱することはできないが、『三代実録』卷第卅二 神護景雲二年の次の記述から、少なくとも画像も使われたことが想像される。

出雲國言、神護景雲二年正月廿四日奉₍₁₀₎「官符」、畫₍₁₀₎吉祥天像一鋪、安₍₁₀₎置國分寺₍₁₀₎。

そして神護景雲三年(七六九)正月八日に称徳天皇が初めて、自ら吉祥天悔過を行ったことは『続日本紀』卷第二十九に述べられている。

この行事は暫く続くが、宝亀二年(七七二)一度諸国の吉祥悔過を取り止めている。しかし翌年一月には復興し、毎年正月一七日間これを修し、以後承和六年(八三九)まで恒例にしている。翌七年から十年(八四三)までは、最勝会及び吉祥悔過を国分寺から国庁に移して行われた。その後は国分寺で行われた所もあり、『最勝王經』の読誦と吉祥悔過の修会は、又陸奥鎮守府でも貞観一八年(八七六)以降行われ、現在では法隆寺の金堂修正会にこの形が伝わっていると(10)言われる。

吉祥天信仰はこのように、吉祥悔過を通して全国に広められた。尚、吉祥悔過の濫觴についても今なお異論があるが、次項で詳説する、東大寺 法華堂の吉祥天立像の造立年代推測の例でも見られるように、公的になる前から、かなり盛んに行なわれていた可能性があると思われる。

国分寺は以後地方政治の廃弛と共に平安から鎌倉時代にかけて次第に衰退の途をたどったが、後宇多天皇の時、律宗西大寺の子院となつた。

聖武天皇は、大仏の建立と国分寺の発願建立を成し遂げた。その妻、藤原不比等の妻、光明子は皇后となり、国分僧尼寺法華滅罪之寺を提唱した。光明皇后は一人息子の基皇子を一歳未滿で無くして、

すでに一人娘の阿倍内親王を皇太子としていた。女性の皇太子など、我国初めてのことであったが、光明皇后の心中は、我娘の天皇即位を懇願したに違いない。

この数年は早魃で凶作が続き、疫病も流行した。それは杉山二郎著『大仏以後』で指摘されているように、天災、人災が相俟って、相当強烈な危機感が平城京は言うまでもなく、全国的に迫っていたと思われる。何とかして鎮護国家を達成したかったであろうし、天皇はその権力を誇示しなくてはならなかった。

当時の国家仏教の受入の意図は言わば、我国古来からの、シャーマニズム的な、呪術が好まれたと想像され、そこでの仏教は、まさに雑密であった。天下太平・国土安穩・五穀豊穰を祈念するとの名目で、国土護持の經典『金光明最勝王經』や『仁王經』『法華經』を重んじ、全国で書写、読誦させ、天皇自らも書写し配布した。しかしその時代にあつては単に、天変地異に対しての祈りだけではなかったはずである。そこでは想像を遙かに絶する、残酷な王権争いが絶えなかった。今こそ、その罪の慙愧に耐え得るだけの、怨敵の退散、誅滅の鎮護、懺悔の行爲が必要であった。十一面悔過、葉師悔過、吉祥悔過、文殊悔過、阿弥陀悔過など種々の悔過が悔過所や、大極殿、国分寺、国庁、多賀城或は八幡宮などで、折りにふれ、時を決め、行う必要があつた。

また聖武天皇は、『大般若經』の書写をはじめ、各地の神社の修造や参拝をしている。

このように多様な悔過のなかで、唯一公的に重視されたのは吉祥悔過である。なぜ本尊を女神 吉祥天としなくてはならなかったのであろうか。次に考察していきたい。

II、女帝と吉祥天像

先にも触れたが、我国は古来からシャーマニズム的な呪術志向が

あり、仏教の受容もそうした基盤に基づく傾向があつた。そこには自ら女神崇拜の傾向があり、それは同時に、卑弥呼の例にもれず、女帝崇拜を意味するものであつても、不思議ではなかった。

吉祥悔過が国家法要となつた時、世はまさに女帝称徳の時代であつたことを忘れてはならない。

阿倍内親王は七四九年即位し孝謙天皇となつた。それ以前にも女帝は、推古へ溯れば、皇極・斉明・持統・元明・元正の六代五人である。しかし天平期になってからの元明・元正は、言わば中継ぎ的存在であつた。孝謙天皇は、当時としては異例の女帝であり、確乎たるその存在を、皇位継承に揺れ動く朝廷内や貴族層に対してのみならず、国民に対しても顕示する必要は大いにあつたと考えられる。その場合女神吉祥天を国毎に祀らせ、悔過させ、自らも国土安穩を願うことは、まさに打って付けの本尊を奉安した、国家行事であつた。

孝謙天皇は再祥し称徳天皇となつた。七六四年である。その三年後、諸国の国分寺での吉祥天悔過会を命じている。仏事に熱心な光明皇后は既に亡くなって七年が過ぎていた。

『金光明最勝王經』には、仏、菩薩、四天王や神将類の武将形天部、諸天善神の他、吉祥天はじめ辯才天、訶梨帝母、堅牢地神等の女神の功德が執拗に説かれている。

これらの女神の造像は、当初は一尊のみ独立してなされたのではなく、梵釈・四天王を交えた曼荼羅状の造形であつたと想像される。随所に諸尊の列挙が見え、特に「四天王護國品第十二」には、受戒する僧のために描く、釈迦を中心とした吉祥天、多聞天の三尊像の造像法とは別に、宮殿の護法尊として、おおよそ次の諸尊の列記が二か所でなされている。梵釈・大辯才天・大吉祥天・堅牢地神・正了知大将・二十八部諸薬叉神・大自在天・金剛密主・宝賢大将・訶利帝母五百眷属・龍王等である。この諸尊を造像したと思われる遺

品は、先にも触れたように、淨瑠璃寺の吉祥天厨子絵に代表されよう。中心の辯才天は八臂で忿奴の形相を示している。

また文献で確認できるのは、『西大寺資財流記帳』巻第一「佛菩薩像」⁽¹⁶⁴⁾第三での四王堂に安置された次の諸尊である。火頭菩薩像二軀・金銅四王像四軀・最勝太子像一軀・将了知大将像一軀・八臂那羅延天像一軀・菩提樹神善女人像一軀・堅牢地神善女人像一軀・吉祥天女像一軀・大辯才天女像一軀。

これらの諸尊が一同に安置された空間は、まさに厳肅なる大羯摩曼荼羅の展開そのものと想像される。

しかし『最勝王經』には特に独立した「大吉祥天品」と「大辯才天品」が所載されていないが、そのいずれの造像法も説かれてはいない。では吉祥悔過に用いられた本尊吉祥天はどのような尊容でなければならなかったであろうか。

現存する天平時代の吉祥天像があまりにも少ないのが残念であるが、それでも唯一貴重な遺品として二軀を挙げることができよう。東大寺 法華堂の塑像 吉祥天立像(図14)と、薬師寺の麻本 吉祥天立像(図24)である。そのいずれも『大吉祥天女念誦法』に説かれる、左手に宝珠を乗せ、右手を与願印とする立像である。

法華堂の塑像 吉祥天立像は、八角形の黒漆厨子に収まっている。像の現状は塑土が剥落し、顔の表情も明確ではないが、頭上に結い上げた宝髻に唐衣を着け、右手を曲げ、左手は下ろしているが、指先の破損のため各々の持物あるいは、表情を確認することはできない。右手に或いは宝珠を執っていたのかも知れない。上体をやや反り返し、高めに結んだ裙帯と、伸びやかに流れる裳の表現によって下半身の長さが強調されている。

この法華堂の吉祥天立像の造立年代を考察するとき、吉祥天立像とあたかも一對と考えられる、やはり厨子に収まっている辯才天像を取り上げる必要がある。中国南北朝時代に、吉祥天悔過の際、

辯才天像も共に安置したとも言われ、この二尊の作風の共通性から、造立を同時と仮定するならば、辯才天像のものと推測される、正倉院蔵「大弁才天女壇」の幡の年紀、天平勝宝六年(七五四)から、吉祥天もこの頃の制作と推定される⁽¹⁶⁵⁾。先にもみたように、吉祥悔過は公的になる以前から行われていたに違いない。

吉祥天は当初吉祥堂に奉置されたのであろうか。

『東大寺要録』巻第十「雜事章之餘」吉祥悔過始事には、『続日本記』神護景雲元年(七六七)の吉祥悔過の勅と相応する、国分寺での吉祥悔過の濫觴と同じ記述⁽¹⁶⁶⁾が見られ、また同書巻第四「諸院章第四 附神社」吉祥堂 には

吉祥御願於此院修之天歷八年吉祥院焼失由之移之羅索院行⁽¹⁶⁷⁾之……

とあり天歷八年(九五四)に吉祥堂が焼失し、その後は羅索院で修法が行われたことをうかがい知ることができる。羅索院で吉祥悔過が行われたことは、また別に「諸會章第五 付相折」にも述べられている⁽¹⁶⁸⁾。

また薬師寺の麻本 吉祥天立像は、画面中央に向かって斜め向きに描かれ、尊容は先にも少し触れたが、両腕を屈して差し延べ、左手に宝珠を乗せている。かすかな頭円光を負い、裳の袖や裾、領巾、天衣が揺れる。髪髻冠を思わせる髪飾りを付け、豊かな黒髪を束ねている。顔立ちは蛾眉豊頬で切れ長の目をした福よかな、唐風美人である。

こうした尊容は、中国唐の中後期時代の官夫の肖像画(図47)や陶俑(図48—①・②)の造形と通ずる。

天平時代の朝廷では、恐らく唐風好みの風潮があったに違いない。仏教の流入をはじめ、官制や年号ばかりではなく、生活に密着した調度品に至るまで、隣国に見習っていることは、今日現存する遺品からもうかがうことができる。

その中の、正倉院宝物「鳥毛立女屏風」の絵に描かれている女性(図49)と、薬師寺の吉祥天は、同時代の制作による代表作として、しばしば女性美の表現の共通性が引き合いに出される。そのルーツを探れば、発見された彩色画(図50)から、西域トゥルフアン近郊のアスターナ⁽¹⁰⁾というところになるが、我国天平時代にあつては流行の最先端をいく理想的な女性美であつたに違いない。

左を向く薬師寺のこの麻本 吉祥天独尊は、恐らく当初は釈迦如来を中心とした三尊形式であつたのであろう。この画像は明治初年まで、鎮守の八幡社に伝えられており、毎年行われる吉祥悔過会の本尊とされてきた。

薬師寺での吉祥悔過は『薬師寺黒草紙』によると、弘安七年(一二八四)には既に八幡社で行われていた⁽¹¹⁾ようであるが、その後の『薬師寺濫觴私考』や『薬師寺新黒草紙』では吉祥悔過の濫觴を宝亀三年(七七二)或いは二年としている⁽¹²⁾。八幡社の薬師寺への勧請は寛平年間(八八九―八九九)とされるから、八幡社での吉祥悔過会はそれ以後にならう。『薬師寺縁起国史抄』には宝亀三年に金堂で初めて吉祥悔過が行われたとあるが、この年は前述のごとく、諸国国分寺での吉祥悔過が停止された年でもあり、薬師寺での吉祥悔過の濫觴及び堂宇については明確さを欠く。

また本象は、天長七年(八三〇)に始められた薬師寺最勝会の本尊とする説もあるが、吉祥天はインド以来、世俗的美女に表現されることが多かった。この薬師寺の像も、成唐時代の典型的な唐美人の、むしろ肖像とも思われる作風である。

当時諸国の国分寺に総てこの様な唐風美人の吉祥天本尊が祀られており、男性にとっては一種の憧れ、女性にとっては授福を願う女神として尊崇されていたであろうことは、『日本霊異記』中巻の一人の優婆塞に「愛欲の心が生じ、吉祥天の像をしたつて、不思議なことがあつた話 第十三」⁽¹³⁾や「貧しい女王が吉祥天女の像を敬い、報いを得た話 第十四」⁽¹⁴⁾などの、聖武天皇の世の出来事としての説話にも象

徴されよう。

美人でなければならぬ吉祥天女像は、即ち女帝の肖像としての価値と意味がなくてはならなかつた。

手本としてきた隣国歴史の少し前には、中国では唯一の女帝則天武后がいた。『金光明最勝王經』を増補翻訳した義浄との関係については、称徳天皇はどのような感想を持っていたのであろうか。

称徳天皇は、看病禪師であつた道鏡と親密になり、天平神護元年(七六五)には道鏡を太政大臣に、さらに翌年(七六六)には遂に、法王の称号まで与えている。

神護景雲元年(七六七)、国分寺での吉祥天悔過会を命じた年、考謙天皇は、道鏡の協力を得て、西大寺造営にとり掛かつた。宝亀元年(七七〇)考謙崩御までには西大寺の完成は成されなかつたが、先の四王堂の建立は見届けたに違いない。諸尊の立ち並ぶ、四王堂内では、『最勝王經』の読誦や購読、或いは吉祥悔過が行われたのであろうか。

結び

吉祥天信仰は、国分寺を通して民間に広められた。しかしそれは、国家の基に奨励された朝廷での信仰、否、極端に言えば女帝信仰であつたのであり、天平時代の女神信仰の中の大きな特徴となっている。

天平以後の吉祥天信仰についての詳細は、別論に譲りたいが、平安時代にも吉祥天悔過の法要は行われていた記録があり、吉祥天像も鎌倉、室町時代を通して盛んに造像されていたことは現存する遺品から、伺い知ることができる。

江戸時代になると、吉祥天は民間信仰の中で招福神として親しまれ、地域によっては七福神にも加えられた⁽¹⁶⁾。また江戸の庶民信仰の中には福神に対する貧乏神として、黒闇天の信仰も行われたようである⁽¹⁷⁾。黒闇天といえは、遙かインドでの幸運ラクシュミーに潜む不運アラクシュミーの尊格が永遠と続いたものに他ならない。

注記

- (一) J. N. Banerjee, *THE DEVELOPMENT OF HINDU ICONOGRAPHY*, INDIA, 1956.
 R. S. Gupta, *ICONOGRAPHY OF THE HINDUS BUDDHISTS AND JAINS*, BOMBAY, 1980.
 L. S. BANGDEL, *The Early Sculptures of Nepal*, N. D., 1982.
 H. Zimmer, *THE ART OF INDIAN ASIA*, N. Y., 1964.
 R. Parimoo etc. *Ellora Caves : Sculptures and Architecture*, N. D., 1988.
 佐和隆研『仏像案内』吉川弘文館 一九七二。
 R・G・バンダルカル『ヒンドウ教—ヴィシュヌとシヴァの宗教—』島岩・池田健太郎訳 せりか書房 一九八四。
 立川武蔵・石黒淳・菱田邦男・島岩『ヒンドウの神々』せりか書房 一九八一。
 長谷川明『インド神話入門』新潮社 一九九〇。
 『望月佛教大辞典』。
 『総合 佛教大辞典』法藏館 一九八八。
 『漢訳対照 梵和大辞典』講談社 一九九三。
 錦織亮介『天部の仏像辞典』東京美術 一九八三。
 (二) 前掲書『望月佛教大辞典』。
 前掲書『漢訳対照 梵和大辞典』。
 前掲書『天部の仏像辞典』。
 『JAPANESE-ENGLISH BUDDHIST DICTIONARY』大東出版社 一九九一。
 (三) 前掲書『漢訳対照 梵和大辞典』。
 (四) 前掲書『仏像案内』。

- 前掲書『ヒンドウ教—ヴィシュヌとシヴァの宗教—』。
 前掲書『ヒンドウの神々』。
 前掲書『インド神話入門』。
 前掲書『望月佛教大辞典』。
 前掲書『漢訳対照 梵和大辞典』。
 前掲書『天部の仏像辞典』。
 (5) 前掲書『仏像案内』。
 前掲書『望月佛教大辞典』。
 前掲書『漢訳対照 梵和大辞典』。
 前掲書『天部の仏像辞典』。
 (6) 前掲書『望月佛教大辞典』。
 前掲書『漢訳対照 梵和大辞典』。
 (7) 同右。
 (8) 同右。
 (9) 『曼荼羅図典』大法輪閣。
 (10) 『續日本紀』卷第廿八 神護景雲元年の条(二四七頁 校註)。
 前掲書『望月佛教大辞典』。
 (11) 前掲書『ヒンドウの神々』。
 前掲書『漢訳対照 梵和大辞典』。
 (12) 前掲書『ヒンドウの神々』。
 (13) 同右。
 (14) 同右。
 (15) 前掲書『インド神話入門』。
 (16) 同右。
 (17) 同右。
 (18) 前掲書『ヒンドウの神々』 一五一頁。『ヴァージャサネーイ・サンヒタ—』は、『ヤジャル・ヴェーター』に属する。
 (19) 前掲書『インド神話入門』。
 (20) 前掲書『ヒンドウ教—ヴィシュヌとシヴァの宗教—』。
 (21) 前掲書『ヒンドウの神々』。
 (22) 同右。
 (23) 『佛書解説大辞典』大東出版社 一九六八。

前掲書『望月佛教大辞典』。

前掲書『総合 佛教大辞典』法藏館 一九八八。

(24) 平田寛編集『日本の仏教 奈良仏教』新潮社 一九八九。

(25) 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』『奈良朝現在一切経疏目録』

原書房 一九八二 一三三頁。

(26) 本文で後述するが、『續日本紀』卷第廿八 神護景雲元年の条に、次のように記述されている。

神護景雲元年春正月己未、勅、畿内七道、諸國、一七日間、各於國分金光明寺、行『吉祥天悔過之法』、：

(27) 『大正藏』二六 三四五頁 上段 四行目〜下段 六行目。

(28) 同右四三八頁 下段 二四行目〜四三九頁 中段 二行目。

(29) 同右 四三九頁 中段 三行目〜四四〇頁 上段 一六行目。

(30) 『金光明經』。

(31) 『金光明最勝王經』。

(32) 『大正藏』一六 三四五頁 上段 一四行目〜二七行目。

(33) 同右 四三九頁 上段 十行目〜中段 二行目。

(34) 『大正藏』三九 三〇九頁 上段 二八行目〜中段 五行目。

(35) 同右 三〇七頁 下段 二七行目〜三〇九頁 上段 五行目。

(36) 同右 三〇九頁 上段 六行目〜三一〇頁 中段 二〇行目。

(37) 同右 三〇八頁 上段 四行目〜五行目。

(38) 同右 二二行目〜二三行目。

(39) 『大正藏』一三 三八一頁 下段 一三行目〜三八三頁 中段 一九行目。

(40) 同右 三八三頁 中段 二〇行目〜三四八頁 下段 二三行目。

(41) 同右 三四八頁 下段 二四行目〜三八八頁 上段 一八行目。

(42) 同右 三八八頁 上段 一九行目〜三九四頁。

(43) 前掲書『写経より見たる奈良朝仏教の研究』『奈良朝現在一切経疏目録』七頁。

(44) 『大正藏』二一 五四九頁 下段 一二二行目〜五五四頁 下段 一三行目。

(45) 同右 五五一頁 上段 二行目〜六行目。

(46) 同右 六行目〜一七行目。

(47) 『大正藏』一八 八七四頁 中段 二六行目〜八七七頁 中段 一行目。

(48) 『大正藏』一六 三四五頁 上段 八行目〜中段 二行目。

(49) 『大正藏』一八 八七四頁 下段 一九行目〜二二行目。

(50) 『大正藏』二一 二五三 中段 最初〜二五五頁 下段 四行目。

(51) 同右 二五四頁 上段 二七行目〜二八行目。

(52) 同右 二五三頁 下段 一七行目〜二五四頁 上段 二四行目。

(53) 同右 中段 六行目〜下段 一八行目。二五五頁 上段 二六行目〜下

段 四行目。

(54) 『大正藏』三九 六二六頁 中段 七行目〜六三六頁 下段 八行目。

(55) 『大正藏』二一 二五二頁 下段 一三行目〜二五三頁 上段 最後。

(56) 同右 二五二頁 下段 一五行目〜一九行目。

(57) 同右 二五三頁 上段 六行目。

(58) 同右 八行目。

(59) 『大正藏』一八 六二二 中段 一八行目〜六二五頁 中段 二三行目。

(60) 同右 六二二頁 下段 二五行目〜六二三頁 上段 最後。

(61) 同右 六二三頁 上段 二〇行目〜二四行目。

(62) 『大正藏』圖二 一一〇〇頁 下段 最初〜一一五頁 上段 七行目。

(63) 同右 一一〇四頁 下段 二三行目。

(64) 同右 一一〇八頁 下段 一行目〜三行目。

(65) 同右 一〇四頁 下段 一行目〜一六行目。

(66) 同右 一一〇四頁 下段 二四行目〜二八行目。

(67) 『大正藏』圖一 六二七頁〜八一五頁。

(68) 大法輪閣『曼荼羅図典』一九九三年。

(69) 空海『御請來目録』(『大正藏』五五 一〇六四頁)。

(70) 石田尚豊『曼荼羅の研究』東京美術 一九七五年。

(71) 同右。

(72) 同右。

(73) 『胎藏舊圖様』は『大正藏』圖像部二 四七七頁〜五六五頁。

(74) 『胎藏圖像』は『大正藏』圖像部二 一九一頁〜三〇一頁。

(75) 頼富本宏『密教仏の研究』法藏館 一九九〇。

- (76) 『大正藏』二二 二五四頁 上段 二七行目〜二八行目。
- (77) 『大正藏』圖像部五 四八六頁〜四九七頁。
- (78) 同右 四八六頁 下段 三行目〜六行目。
- (79) 同右 四八六頁 下段 七行目〜一行目
- (80) 『阿婆縛抄』百十一「吉祥天」(『大正藏』圖像部九 四四三頁 下段 最初〜四四六頁 上段 七行目)。
- (81) 『阿婆縛抄』の吉祥天像は『大正藏』圖像部九 四四四頁 圖像七四。
『別尊雜記』の宝藏天像は『大正藏』圖像部三 五五八頁 圖像 二四四。
『圖像抄』の宝藏天像は『大正藏』圖像部三 五三頁 圖像 一三七。
- (82) R.S.Gupte, *ICONOGRAPHY OF THE HINDUS BUDDHISTS AND JAINS BOMBAY*, 1980.
前掲書『ヒンドゥーの神々』
- (83) マトゥラー美術館蔵「クムラとガジャラクシュミー立像」石造。
- (84) 前掲書 R.S.Gupte, *ICONOGRAPHY OF THE HINDUS BUDDHISTS AND JAINS*.
- (85) 前掲書 *ICONOGRAPHY OF THE HINDUS BUDDHISTS AND JAINS*. ヲンドゥーの女神としてのマン・ラクシュミー。
- (86) 同右 ヒンドゥーの女神としてのラクシュミー。
- (87) 前掲書『ヒンドゥーの神々』。
- (88) 前掲書 *ICONOGRAPHY OF THE HINDUS BUDDHISTS AND JAINS*
前掲書『ヒンドゥーの神々』。
- (89) 前掲書 *ICONOGRAPHY OF THE HINDUS BUDDHISTS AND JAINS*.
- (90) 同右。他にインド絵画にも多数見られる。
- (91) 前掲書 *ICONOGRAPHY OF THE HINDUS BUDDHISTS AND JAINS*.
- (92) 『天部形像』所載「辨才天」
- (93) 『天部圖像』所載「吉祥天」
- (94) 『胎藏圖像』所載「大吉祥菩薩」「大成就吉祥菩薩」「大塔吉祥菩薩」
- (95) 『寶樓閣曼荼羅』中の「吉祥天」
- (96) 『天部圖像』所載「吉祥天」
- (97) 『大正藏』一六 四二九頁 上段 一六行目〜一九行目。
- (98) 『淨瑠璃寺流記事』(『大日本佛教全書』第一一九卷 寺誌叢書第三)六頁 上段 一五行目。
- (99) 詳細は後述する。
- (100) 『大正藏』一八 八七四頁 中段 二五行目〜八七七頁 中段一行目。
- (101) 同右 八七六頁 上段 一八行目〜最後。これについての詳細は、後述するがこの記述は『覺禪鈔』に於て「吉祥天曼荼羅」一七 で引用されている。
- (102) 小西正文「日本の古寺美術」5 興福寺「保育社」一九八七。
- (103) 『興福寺濫觴記』(『続々群書類従』一一)四五頁 下段 最初〜六行目。
- (104) 『幸福寺流記』(『大日本佛教全書』第一二三卷)一〇頁 下段 一二行目〜一四行目。
- (105) 『七大寺日記』(『続群書類従』二七)五〇二頁 下段 最初〜五行目。
- (106) 大江親通「七大寺巡禮私記」(『校刊美術史科』寺院篇上卷 藤田經世篇 一九七二) 五五頁 九行目〜一〇行目。
吉祥堂南向 五間四面瓦葺 此堂亦小塔院、五枚障子圖佛像、其佛飛天繪様尤神妙也、正了知大將繪像曼荼羅 同不可思議也、毘沙門并吉祥天像 已上障子繪像也
- (107) 『圖像抄』(『大正藏』圖二)「吉祥天女」四三頁〜四四頁。
- (108) 『別尊雜記』(『大正藏』圖三)「卷第四五 吉祥天・寶藏」 五五三頁〜五五五頁。
- (109) 『覺禪鈔』(『大正藏』圖五)「天部卷一〇九 吉祥天」四八六頁〜四九七頁。
- (110) 『二八部衆并二神將圖』(『大正藏』圖七)「二二 大辯功德天」四九四頁。
- (111) 『天部圖像』(『大正藏』圖七)五〜二二 吉祥天 五九六頁〜六〇三頁。
- (112) 『阿婆縛抄』(『大正藏』圖九)「第一四一 吉祥天」(図は『寶藏天女陀羅尼法』に依る) 四四三頁〜四四六頁。

(113) 『諸尊圖像集』(『大正藏』圖二二)「四一 功德天」八八四頁。

(114) 『四種護摩本尊並眷屬圖像』(『大正藏』圖一)「九三 功德天」八六七頁。

(115) 紀秀信『佛像圖彙』儀軌による仏像図版集「国書刊行会 一九七四」諸天部「吉祥天 一〇三頁」「観音」八部衆「大辯功德天 一一四頁」「七福神」吉祥天 一三四頁。

(116) 御室版『大悲胎藏大曼荼羅』(『曼荼羅図典』大法輪閣 一九九三)。「蓮華部院(観音院)四六頁」六六頁。「虚空藏院」功德天 一五八頁。「最外院 南方」毘紐女 一九〇頁・黒闇天女 一九八頁。「最外院 西方」那羅延天妃 二一九頁。

(117) 醍醐本『大悲胎藏大曼荼羅』(『大正藏』圖二)「蓮華部院」六六頁「六七頁」。蘇悉地院「功德天 六四七頁」「外金剛部院」毘紐女 六〇五頁。

(118) 『胎藏圖像』(『大正藏』圖二)「蓮華部」二四頁「二八頁」。「最外院那羅延天后 一五三頁」。

(119) 『胎藏舊圖様』(『大正藏』圖二)「第四院東」妙吉祥菩薩 五四〇頁。「最外院西」吉祥天女 五五一頁。

(120) 『大悲胎藏三昧耶曼荼羅圖』那羅延天后は『大正藏』圖二 四六一頁。毘紐女は『大正藏』圖二 六〇五頁。毘沙門天后は『大正藏』圖二 四〇九頁。

(121) 『曼荼羅集』(『大正藏』圖四)「吉祥天曼荼羅」功德天 一九三頁。「寶樓閣經曼荼羅」「建立曼荼羅品 第七」「畫像品 第八」 吉祥天女 一七六頁「一七七頁」。

「太元曼荼羅」功德天女 一九四頁。「菩提場莊嚴經曼荼羅」吉祥天女 一七六頁。

「毘沙門曼荼羅」吉祥天女 一九三頁。

(122) 『大正藏』二〇 二七九頁 下段 最初「二八五頁 上段 最後」。

(123) 同右 二八二頁 中段 一三三行目「二五五行目」。

(124) 『大正藏』二一 三四二頁 下段 一五行目「三四三頁 中段 一六行目」。

(125) 同右 三四三頁 上段 一三行目「一六行目」。

(126) 『大正藏』一八 八七六頁 上段 一八行目「中段 一行目」。

(127) 『大正藏』二一 二二五 下段 一六行目「一九行目」。

(128) 『覺禪鈔』(『大正藏』圖五)「天部卷一〇九 吉祥天」四八六頁「四九七頁」。

(129) 『大正藏』圖五 四八七頁 中段 二〇行目「二二行目」。

(130) 同右 下段 二行「四行目」。なおこの文の後に次のように記され、先に述べた、「七大寺日記」及び「七大寺巡禮私記」の記述に相応している。「七大寺日記」は嘉承元年(一一〇六)に、『覺禪鈔』は建保五年以後(一一四三)「二一七」『佛書解大』頃に成っている。

或云。元興寺吉祥靈像。付此經説。但上畫釋迦三尊。

(131) 同右 下段 七行目「八行目」。

(132) 『大正藏』圖九 四一七頁「四二五頁」。

(133) 同右 四一八頁 上段 一行目「一四行目」。

(134) 前掲書「天部の仏像辞典」一〇七頁。

大橋一章『日本の古寺美術』4 薬師寺「保育社 一九八六。一九八頁」。

(135) 『大正藏』一六 四二七頁 中段 四行目「四三三頁 下段 一〇行目」。

(136) 同右 四三二頁 中段 一四行目「一七行目」。

(137) 『大正藏』圖五 四八七頁 上段 二五行目「中段 七行目」。

(138) 同右 中段 八行目「九行目」。

(139) 同右 下段 一行目「一三行目」。禪賦師童子を子とし、毘沙門天との三尊形式の例は、鞍馬寺藏「木造 毘沙門天王 吉祥天 善賦師童子立像」(図27)等を挙げる事ができる。

(140) 前掲書「奈良仏教」二五五頁。

青木和夫『日本の歴史』3 奈良の都「中央公論社 一九六五」。

前掲書「望月佛教大辞典」。

児玉幸多『日本史年表』吉川弘文館 一九九二。

(141) 『大正藏』一六 四二六頁 下段 二七行目「四二七頁 中段 一三行目」。

(142) 同右 四四二頁 上段 一四行目「四四四頁 上段 九行目」。

(143) 同右 四〇三頁 上段 最初「四〇四頁 中段 二六行目」。

(144) 同右 四一頁 上段 一七行目「四一三頁 下段 六行目」。

(145) 同右 四三三頁 下段 七行目「四一七頁 下段 一六行目」。

(146) 同右 四三八頁 下段 二五行目「四三九頁 中段 二行目」。

(147) 同右 四三九頁 中段 三行目「四四〇頁 上段 一六行目」。

- (148) 同右 四三四頁 中段 二四行目〜四三七頁 下段 一三行目。
 (149) 同右 四三七頁 下段 一四行目〜四三八頁 下段 一三行目。
 (150) 同右 四五五頁 中段 二二行目目〜下段 一三行目。
 (151) 同右 四四〇頁 中段 一七行目〜四四一頁 上段 二四行目。
 (152) 同右 四四四頁 下段 二六行目〜四四六頁 下段 最後。
 (153) 『日本書記』(『六圖史』朝日新聞社 一九二九)九一頁 七行目。
 (154) 『東大寺要録』(『續々群書類従』第一)四一頁 下段 一行目。
 以四月八日設齋東大寺供養廬舍那佛敬欲開元邊眼……
 (155) 『日本書記』卷廿九 三二〇頁 五行目〜三二二頁 一行目。
 七月……請_レ二百僧、讀_レ金光明經_レ於宮中、
 (156) 前掲書『奈良仏教』二五四頁。
 (157) 前掲書『日本書記』三二〇頁 三行目。
 (158) 『續日本紀』卷第廿八 神護景雲元年の条 一四七頁 四行目〜六行目。
 (159) 前掲書『日本の歴史』3。
 (160) 『三代実録』卷第卅二 一〇五頁 一三行目〜一四行目。
 (161) 『続日本紀』(『東洋文庫』五二四 平凡社 一九九二)。
 (162) 前掲書『奈良仏教』二五五頁。
 (163) 杉山二郎『大仏以後』学生社 一九八六 「七 平城京、造寺造仏に隠されたもの―大仏建立の理念実現の後に得たもの―」一六五頁〜二〇二頁。特に、重金屬公害の問題点指摘は興味深い。流行していた疾病とは、まさにこの重金屬公害による症状であろう。
 (164) 『西大寺資財流記帳』(『続群書類従』第二七下)一四三頁 上段 一四行目
 下段 一〇行目。
 (165) 川村知行『東大寺Ⅰ「古代」』(『日本の古寺美術』6)保育社 一九八六 一四二頁。
 (166) 『東大寺要録』(『続々群書類従』第一)一八六頁 上段 一三行目〜一六行目。
 (167) 同右 六三頁 上段 一七行目〜一八行目。
 (168) 同右 七六頁 下段 一行目。
 吉祥御始_レ自_二八日_一修_レ之_二箇夜_一於_二羅索院_一
 行_レ之_二但律宗高野天皇始被_レ修_レ之_一
 (169) 井上光貞『日本古代の国家と仏教』岩波書店 一九七二。
 (170) 前掲書『大仏以後』一五一頁。
 林良一『シルクロード』美術出版社 一九七〇 一八九頁。
 (171) 『薬師寺黒草紙』(『続々群書類従』第一) 四七九頁 上段 最初〜八行目。
 (172) 『薬師寺濫觴私考』(『大日本佛教全書』第一一八卷) 八頁 上段 二行目。
 『薬師寺新黒草紙』(『続々群書類従』第一)四九〇頁 下段 一八行目〜一九行目。
 (173) 『薬師寺縁起国史抄』(『大日本佛教全書』第一一八卷) 一〇〇頁 二行目〜一〇二頁 一行目。
 (174) 『日本靈異記』(『東洋文庫』九七 平凡社 一九九二)九九頁 最初〜一〇〇頁 一行目。
 (175) 同右 一〇〇頁 二行目〜一〇二頁 一行目。
 (176) 金岡秀友 柳川啓一監修『仏教文化事典』佼成出版社 「貧乏神と福神」六九〇頁。
 (177) 同右。
 追記
 この拙論に掲載の図版のために、資料の提供及び、御理解、御協力下さいました方々に、深謝の意を表します。

The Place of the Goddess in Buddhism (II)

—Laksmi—

Yukiyo Tashiro



図3 ガジャラクシュミー立像
石造 バタン市 ネパール



図2 ガジャラクシュミー立像
石造 アラバード大学美術館蔵



図1 ガジャラクシュミー立像
石造 バールフト欄楯柱



図5 ガジャラクシュミー坐像
石造 エローラ第一六窟



図4 ガジャラクシュミー坐像 石造 マハーバリプラム



図7 ラクシュミー 石造 ベンガル出土



図6 ガジャラクシュミー坐像 石造 エローラ第一四窟



図9 ディーワーリー・ラクシュミー 油彩画



図8 ラクシュミー 油彩画



图13 吉祥天立像 木造
薬師寺蔵



图12 吉祥天立像 木心乾漆造
西大寺蔵



图11 吉祥天立像
塑造
法隆寺蔵



图10 吉祥天立像
塑造
東大寺三月堂蔵



图16 吉祥天立像 木造 当麻寺蔵



图15 吉祥天立像 木造
園城寺蔵



图14 吉祥天立像 木造 唐招提寺蔵



図19 吉祥天立像 木造 法隆寺蔵



図18 吉祥天立像 木造 浄瑠璃寺蔵



図17 護法尊立像 木造 園城寺蔵



図22 吉祥天倚坐像 木造 興福寺蔵



図21 吉祥天立像 麻本着彩 薬師寺蔵

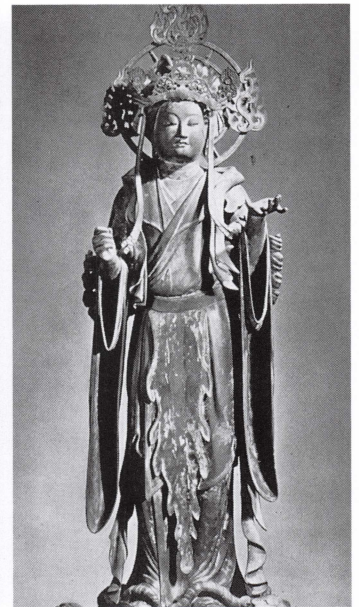


図20 大弁功德天立像 木造 妙法院蔵



图25-① 宝藏天女 『別尊雜記』



图24 吉祥天女 『阿娑縛抄』



图23 吉祥天坐像 『覺禪鈔』

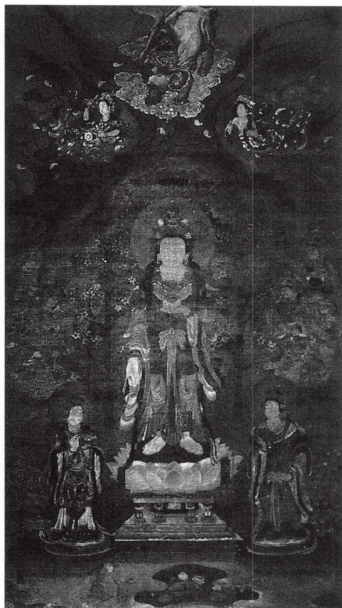


图26-② 吉祥天曼荼羅図
絹本着彩
MOA美術館蔵



图26-① 吉祥天女 『圖像抄』



图25-② 宝藏天 『天部圖像』



図29-① 吉祥天 『天部圖像』



図28 大辯功德天
『二十八部衆并十二神將圖』



図27 毘沙門天・吉祥天・善膩師童子立像
木造 鞍馬寺蔵



図31 那羅延天后 『仁和寺版 大悲胎藏
大曼荼羅』 「外金剛部院」



図30 功德天
『四種護摩本尊並眷屬圖像』



図29-② 吉祥天 『天部圖像』



図34-① 加彩女子 陶俑
唐時代



図33 都督夫人大原王氏礼仏図 壁画
燉煌 中国



図32 功徳天
善白色

図32 功德天 『仁和寺版 大悲胎藏大
曼荼羅』 「虚空蔵院」



図36 樹下美人図 絹本着彩
アスターナ出土



図35 鳥毛立女屏風 紙本淡彩
正倉院蔵

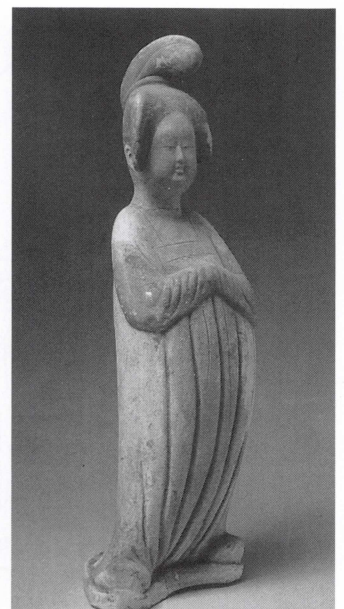


図34-② 加彩女子 陶俑
唐時代